

台湾漢族における祭祀活動と紙製品の研究 ——主に金銀紙を中心として——

蘇素卿*

序 章

一. 問題提起と研究目的

台湾の寺廟へ行けば、必ず金銀紙を焼くための金炉、金亭が設けられ、中から金銀紙を焼いた煙がゆらゆらと立ち上っているのを見ることができる。鈴木清一郎氏の言葉を借りれば、「内地の神社佛閣に於いては必ず賽銭箱が備えられ参詣者は之に若干の銭貨を投げ入れるのであるが、台湾には従来其の設けなく金紙を供え之を焼く風がある」（鈴木 1934: 56）と言われる。このように、昔から現在に至るまで、人々は様々な民間行事の際に、特定の時間や特定の寺廟などにおいて「焼金拜々」し、多数の家庭にも金銀紙を燃やすための「金鼎」が必要品として用意され、自分の家の屋内や屋外で「焼金拜々」する。民間信仰においては、神仏・死者なども現世と同様に金銭、日常用品などを必要とすると一般的に信じられている。紙製品に火をつけて燃やすと、煙が朦朧として立ちのぼり、天界や冥界の神仏や祖先・亡霊に届くと考えられている。現在でも、祖先や神仏と関係づけられた様々な祭祀活動においては、欠かすことができない供え物の一つである。最近では特に金銀紙銭などを燃やす分量が経済発展とともに益々増加する傾向がある。

紙製品を燃やす習俗の由来は、「古代には鬼神を祭るのに圭璧幣帛を用い、終わって土中に埋めた。その後後漢の時代に紙が発明され、死者に紙の銭を用いるようになり、魏晋時代からその風習が始まって、以来階級の上下を問わず広く通行するようになった」という（澤田 1991: 188）。中国大陸では文化大革命以降、紙製品を燃やすことは迷信的行為として厳しく禁じられたが、最近、また復活して来ている光景が漢族地域で見られるようになった。ただし、燃やす分量や種類は、台湾、香港、東南アジアの華人地域におけるほど豊富ではない。

私は1995年の夏に亡くなった祖母の葬送儀式の全過程について記録した時に、燃やされた紙製品が多かったことに気づいた（蘇 1995）。例えば、亡魂が冥途へ行くための乗り物とされる「紙轎」、それを担ぐ「紙轎夫」や家屋としての「紙厝」、旅費としての「紙銭」を焼却した。また、出棺するまでに行われた法事の儀式の中でも「銀紙」、「往生銭」、「庫銭」、「蓮花金」などの大量の紙製品が燃やされた。「なぜ、あの世にはこんなに大量の金が必要なのか」という単純な疑問が、本研究の動機となったのである。

なぜ紙製品を昔から今に至るまで使用し続けるのかという原因を理解するためには、紙製品の使用と密接に関係する民俗的観念や民俗宗教の実際的な状況などとの関連を広く考えていく必要がある。特に紙製品を多く使用する行為の背後に存在する漢族の世界観、冥界観、金銭観をも明

*東北大学文学部講師

らかにすることが重要であろう。

二. 先行研究

紙製品や金銀紙銭についてのこれまでの研究は、台湾出身でフランスで研究をした侯錦郎氏(Hou,Ching-lang)の論文『中国宗教における奉納するお金と金庫の観念』(1975)は、一番学術的でまともなものであると思われる。氏は歴史文献や考古資料、古典文学などをよく調べて基本的な観念も解明している。日本人の研究としては可児弘明氏(1974)が「廟の金爐、街頭、墓地などで焼いて(焼金)、神明や死者に贈る。これを受けた神明や死者が陰間の費用に当てるとされていることは改めて言うまでもない。従って神明や死者を忘れず、誠心をもって仕えている意志表示となる。また、陰間で恵まれた経済生活をしてもらえば、その破綻によって人間に加えられる祟りは避けられるという心理的機能を持つ」と紙銭の役割について述べている。古家信平・松本浩一氏(1991)の論文では、王爺醮祭に使われる紙銭は次のように記されている。「王爺の神像が人々に担がれて河原へ向かって動き出し、紙銭を撒きながら進行した。拾った紙銭はお守りにする。……王爺船が河原に到着すると、トラック二台分の紙銭や払いに使った人形、箒、紙の首かせなどが王爺船の回りに積み上げられた。……人々は帰宅後、灯蒿を倒し、家の入口に設けた祭壇の前で金紙を焼いた」。紙製品に言及する文章は、ほかにも大変多く存在し、例えば、気づいたものを年代順に並べると、丸井圭治郎(1919)、鈴木清一郎(1934)、江延遠(1936)、巫永福(1942)、窪徳忠(1976・1981)、劉枝萬(1981)、大淵忍爾(1983)、徐福全(1984)、唐茂松(1985)、Gates,Hill(1987)、澤田瑞穂(1991)、渡辺欣雄(1991)、末成道男(1992)、丸山宏(1994)、曾景来(1995)などの諸氏の研究がある。その中では江延遠、曾景来、丸井圭治郎氏の日本統治時代の台湾習俗研究および中国大陸出身の唐茂松氏の論文には、特に金銀紙銭を燃やす習俗に対して厳しい批判が書かれている。

丸井圭治郎『臺灣宗教調査報告書第一卷』(1919:197)には、「古に親死せば、衣裳を設け、明器を制し、鏹銭を用いたるは蓋し當然のことに属す、而して後代に至りて物力を惜むの情と道教的迷信の流行とに由りて、各種の所謂紙銭なるものを生するに至りたること、亦自然の數なるとす、蓋し神佛に祈請するに當りて、其の微忱を表せんか為めに、或物を捧げ或は死者を送るに當たりて、其の情を盡くさんが為めに、或物を餞するは是れ實に人情自然の發露にして、吾人は之に就きて、何等の不可を見すと雖も、我俗の賽銭の単に貨幣の流通に過ぎざるに反し、焼金の俗の為に、毎年百萬金を糜耗するに至ては吾人は決して、雲煙過眼を以て之を見ること能はざるなり」。江延遠『台湾葬儀改善要覽』(1936:71)には、「本島で所謂「焼金銀紙とか紙銭とか庫銭」などと申しまして一年間に二百萬圓と云ふ莫大なる金銭を煙に化する事は實に馬鹿馬鹿しいことではありませんか。今更申すまでもなく斯る慣習は経済的にも衛生的にも全く無益の業でありまして荒唐無稽の悪習であります」。曾景来『台湾宗教と迷信陋習』(1995:181)には、「今日吾人が金銀紙焼却の廃止を唱導するのは単なる経済問題からして之を云々するものではない。金銀紙の焼却は経済的には寧ろ些少なる問題であり、その風教に及ぼす悪影響に反つて大なるものがあ

る。単直に言へば金銀紙焼却の起こりは迷信から始まっている。而してこの迷信が更に他の迷信を生み、今では本島に於ける迷信の各方面に於いて金銀紙焼却と關聯していると言つてよい位である」。

上記の丸井氏の意見は焼紙銭の心情に多少の理解を示すが、経済的に無駄なことと見ている。また、江氏も無益であることを強調する。曾氏はやや違って焼紙銭の風教に対する悪影響の面を主張している。各氏様々あるが、いずれも「迷信」であるから改めなければならないとする点で一致している。

唐茂松の「從“冥幣”略析“燒紙”旧俗」(1985)には、「冥幣は荒唐無稽な迷信的な品物であり、形式的には鬼神に専用させるものだが、本質的に現実社会のありさまを反映し、社会に対して深刻な影響を与え、人々の思想を麻醉し、心靈を毒化し、有害な作用を引き起こす。……明代の崔源族の墓から発見した金箔銭の上に、「冥中収用」、「富貴長命」、「往升仙界」などの文字が書かれている。冥幣はこのような特殊な実物の形で、無言で「靈魂不滅」という唯心主義を宣伝する。冥幣は「金錢萬能」という私的觀念を行き渡らせる。金錢は搾取制度の社会では、追求され、占拠され、争奪される目標となる。金錢の前に人々は搾取階級の中にはっきりと現われている野望、残酷、腐敗の本性を暴露する。晋朝の魯褒が書いた有名な『錢神論』には、「内側が方形であり、外側が円形である」錢を「為世神宝」と称し、「錢があれば、危険に遭う時に無事であることができ、死者を復活させることができる。錢がなくなると、尊い者も卑賤となり、生きている者を殺すことができる」。古跡発掘の際に発見される死者とともに埋葬された大量な冥幣は、正に現実社会で現れている「金錢萬能」の縮図であり、搾取階級にある占有欲の臭みを発散している。……冥幣は一つの迷信物として、人々に対しいかなる有益の価値も持っていないし、かえって人々の精神を破壊する作用を引き起こす。それは思想を根本的に改めていない少数の祈祷師、巫女が封建社会の迷信を散布し、詐欺行為を行うための道具となっているのである」。

以上の唐氏の意見は、冥幣すなわち金銀紙銭の作用について、人々の思想を麻醉し、唯心主義を宣伝し、搾取階級の所有欲を表すと言っている。ここには中国大陸の宗教解釈や唯物史觀の用語が見える。しかし結局、金銀紙銭を迷信の産物と考える点では、上記の丸井氏や江氏の意見と同じである。このように金銀紙銭や紙製品を迷信として否定的に見ることは簡単であるが、それらの意義をより総合的に詳しく考え直すことが必要だと思う。

三. 研究方法及び論文構成

本研究は民俗学と中国宗教研究の知識を援用し、フィールドワーク、現地の文献、先行研究文献の利用に基づき、四章に分けて、金銀紙を中心とする祭祀用の紙製品について考察したい。まず、第一章では「紙製品に関する起源、歴史、伝説」について、歴史文献の解説を行い、民間伝説を参考にして、紙製品使用の来歴を辿る。第二章では「現在において使用されている紙製品の概要」について、その種類、使用目的および製造の実際を検討する。ここでは台南市に住む主婦や寺廟の関係者、紙製品の職人、商人から聞き取った内容よりつつ、現在通用する紙製品の種

類、それぞれの特徴と使用目的を整理する。第三章「事例研究」においては、主に葬送儀礼、廟の小法事と醮祭、年中行事と人生儀礼などを中心に紙製品の使用の実際を見て行く。第四章では「紙製品使用の背後にみられる観念」について、特に漢族の冥界観、金銭観、焼金銀紙の民間性を解明するために、祭祀活動に使われる紙製品の意味とその使用の動機を考察したい。

この論文では註は各節の後に付け、最後に参考文献のすべてを示した。付録として写真の資料を添付した。なお、参考文献の配列は年代順とした。

第一章 紙製品に関する起源、歴史、伝説

一. 起源

後に言及することになるが、焼紙銭の習俗が定着するのは唐代頃からであるとされる。しかし、突然に焼紙銭の習俗が出てくるとは考えにくい。そこでその前の歴史的背景はどうだろうか見てみよう。例えば、考古学者の研究によると、古代中国においては、漢代頃から、墓中の随葬品は、銅製の儀礼的道具から次第に陶器で作った日常生活用品、道具などが、増加して、冥界における豊かな経済生活を象徴するものが、多くなっていくという（蒲 1993:198～201）。これは後の紙銭の発生に直接つながってくる現象と思われる。

民間信仰によれば、金銀紙は天界または冥界では現金として通用し、現世の紙製品でも、それを焼けば天界または冥界に届くという。葬式、墓参、清明節、年忌、法会、寺廟への参詣、祭祀など、祖先や神仏と関係づけられた信仰行事には、欠かせないものとされている（窪 1981:123）。では一体いつから紙製品を焼くようになったのか。

その起源については、例えば丸井圭治郎氏によると「支那の俗、古者、天を祭るに、柴を泰壇に燔けり、夫れ天は高くして昇る可らず、地物の重くして下降するものは以て天を享するに適せず、只火煙能く上騰して天に到るあり、是れ燔柴の禮の起りたる所以にして、而して後世神を祭るに方りて、金紙を焼くの俗、亦た蓋して此意に依るものに外ならず。」といわれ、古代の燔柴に起源を求めている（丸井 1919:196～197）。巫永福氏は『台湾風俗誌』の驅邪及び招福の章に基づいて、以下のように記している。「土人の祭祀、慶事、葬喪には金紙又は銀紙を焼く。これわが国の賽銭又は六道銭の意なり。遠く来歴をたづぬるに、『新唐書王嶼列傳』に曰く、嶼、祠察使となる、而して漢より以来葬喪に皆金を埋む、然るに後世里俗、漸く紙を以て銭に寓し、以て鬼に事ふることをなす。是に至りて嶼、民をして此紙銭を用ゐしむ。今即ち慶事には金紙、葬事には銀紙を焼くものとす。又一説に唐の李世民長平を過ぎり、白起の生理めせる趙卒四十萬の慘禍を悼み、紙を焼きて功德をなしたりと云ふ」（巫 1942）。これによれば、紙銭の初期の使用例は、唐の時代まで溯れることになる。

唐代に金銀紙を焼いて戦死した者を祭った伝説としては次のものがある。「唐の魏徴、嘗て龍王を殺した時、太宗之が為めに氣絶しその魂冥土に遊ぶ。時に唐朝の成立と共に掃蕩された匪賊草寇の衆靈啼哭して居るのを見、陰間の一金庫の金を彼等に與へ功德とした。太宗は更に陰間輪廻の状を目撃し、我陽間に歸らば汝等の為めに超生を圖らんと誓った處、幾何もなく蘇生して陽

間に歸った。然るに陰間に通用した金銭は金銀紙であったため、太宗は天下に大赦して高僧を集め盛んに死者の爲めに金銀紙を製し、之を焼き法要を営んだのが金銀紙の始めであると云われて居る」(鈴木 1934:55)。

現在の日本の学者は、紙製品の起源をどのように説明しているだろうか。例えば、『道教事典』を引くと、次のように記している。「漢代では冥界の人を祭る際に錢貨を用い、世俗一般では、錢貨に代え紙銭を用いた(『唐書』の列伝第四十四王瓌の伝所収)とあり、そこには金紙・銀紙の区別の記述はない。『法苑珠林』(668年撰)の燃燈篇に金紙・銀紙の別が見られる。鬼神・祖霊を祭るとき、白紙銭(銀紙)を焼くと、鬼神・祖霊は錢霊を得ることができ、黄紙銭(金紙)を用いれば冥界では金銭となり、それを用いることができるとある。『太平広記』にも同様のことが述べられている。また『清異録』にも、祭祀に黄紙・白紙を用いることについて、『法苑珠林』『太平広記』と同じ意味合いをもって記されていることから、唐代の頃には祭祀としての焼金の儀礼は一般化していた」(桜庭 1994:230)。この説明も、起源については、唐代に一般化していたと述べており、先の引用と合わせて、金銀紙銭が実際に使用され始め、定着したのは唐代と考えてよいと思う。

その他の祭祀用の紙製品についても、現在の考古学的発見によれば、ほぼ唐代まで溯ることができるようである。今まで発見されたもっとも古い紙製品の実物という点、1973年に新疆維吾爾自治区の吐魯番阿斯塔那古墓群から発掘された一つの紙棺である。この棺は長2.3m、前高0.87m、寛0.68m、後高0.5m、寛0.46m、棺の骨組みは細い木で出来たもので、外は廢紙を張り、外見は濃い紅色のものである。この棺に使う廢紙はほとんど唐天宝十二年から十四年(753~755)の間に西庭、西州あたりの駅館が馬飼料の収支に使う伝票である。考古現場遺跡の分析によれば、死者を埋葬する時に、まず、死体を廢紙で出来たむしろの上に置き、それから、紙棺をその上に覆う。紙棺とともに発掘された買地券の内容によれば、この紙棺は唐大歴四年(769)、およそ今から一千二百年前のものと判明される(潘 1993:1)。これは紙の棺の例であるが、紙製品にはこの他にも多くの種類がある。例えば紙人、紙馬、揺錢樹、金山銀山、牌坊、門樓、宅院、動物などである。これらの実物が将来発掘される可能性もあり、年代が早くなるかも知れない。

二. 歴史

紙銭使用および紙馬使用の歴史的な説明については、清代の趙翼という学者が書いた『陔餘叢考』卷三十「紙銭」および「紙馬」の条には多くの文献があげられている。この文章は大変価値があるので、次にその内容を詳細に見てみよう。

(原文)

歐陽公謂、五代禮廢、寒食野祭而焚紙錢。以為紙錢自五代始。其實非起於五代也。漢書 張湯傳、有人盜發孝文園瘞錢。如淳曰、埋錢於園陵、以送死也。南史吳苞、將終、謂其弟子曰、吾今夕當死。壺中大錢一千、以通九泉之路。是漢及六朝、固皆用實錢。然、漢書郊祀志、令祠進五時、牢具、皆以木寓馬代駒、及諸名山川用駒者、皆以木寓馬代。則 祭祀用牲、已有以木象形者、特

未用於錢耳。事林廣記及困學記聞皆謂漢以來有瘞錢，後里俗稍以紙寓錢，而不言起自何代。唐臨冥報錄曾三異同話錄謂，唐以來始有之，名曰寓錢。言其寓形於紙也。法苑珠林則謂，起於殷長史。洪慶善杜詩辨證則謂，起於齊東昏好鬼神之術。剪紙為錢，以代束帛。二說雖不同，然，封氏聞見記謂，紙錢魏晉以來，已有之。今自王公至士庶無不用之。封演，唐德宗時人，去六朝未遠，所見必非無據，則紙錢之起於魏晉無疑也（18a～18b）。……………南岳道士秦保言偶曰，眞君上仙何須紙錢，夜夢眞人曰，此冥吏所藉，我何須之，由是人皆信用紙錢。夷堅志，鄒智明得暴疾，請僧誦孔雀明王經，見有孔雀來逐鬼，鬼謂鄒曰我輩當去，願多燒冥錢與我。乃呼僕買楮幣焚之。諸鬼盡去。項明妻胡氏，已死。其魂仍來，與女同宿且語項云，吾父室廬，敝擬建新居，求錢助費，乃焚紙錢數百束。又云，錢多無人輦送，乃畫兩力士焚之，逐去（19b）。……………天香樓偶得云，俗於紙上畫神像塗以彩色，祭賽既畢，則焚化，謂之甲馬。以此紙為神所憑依，似乎馬也。然，蜎菴瑣言云，世俗祭祀必焚紙錢甲馬（20b）。

（訳文）

歐陽公（北宋 [1007～1072]）が云うには、「五代に禮がすたれ、寒食の日に野の祭祀で紙錢を焚する。それゆえ紙錢は五代から始まる」という。しかし、実は五代からではない。

『漢書張湯傳』には、「孝文園に埋められた錢が盗まれた」と記す。如淳が云うには、「園陵に錢を埋めるのは、死者に送るためである」。

『南史』によると、呉苞が亡くなる直前に弟子に次のように言った。「私は今夜で死ぬから、壺の中に大錢一千を入れなさい、これで九泉の路を通過できる」と。それゆえ漢および六朝では、もともとは皆本物の錢を使用したのである。

然るに、『漢書郊祀志』によれば、「令祠が天地の神や五帝を祭る祭場に使う生けにえは、皆木馬を以て駒に寓する、また、有名な山川を祭る場合で駒を用いる時も、皆木馬を以て駒に寓する」という。即ち、祭祀用の生けにえは、既に木を以て象形することがあった。ところが、特に錢には未だに形象を用いていない。

『事林廣記』（宋代）および『困學記聞』（宋代）には、「漢より以来、皆埋めるための錢があった、その後、里俗は漸く紙を以て錢に寓する」というが、何代からとは言っていない。

唐臨の『冥報錄』と曾三異の『同話錄』によると、「唐になってから、始めて紙錢があり、名は寓錢と称する」。それは錢を紙で形象するのである。

『法苑珠林』（唐、668年撰）には、「殷長史から始まる」という。

洪慶善の『杜詩辨證』には、すなわち次のようにいう。「齊東が鬼神の術を大変に好んだことから始まる、紙を切り、錢を作り、それを束帛の代用にした」という。

二説は異なっているが、『封氏聞見記』（唐代）によると、「紙錢は魏晉より以来、既にあつて、今や王公から士庶に至るまで、皆使用しないものはない」という。封演は唐の徳宗の時代の人であり、六朝から遠くない時代の人なので、彼の見た所は根拠がないわけではない。それで紙錢の起源は魏晉の時からに違いない。……………。

（『北夢瑣言』によれば）「南岳道士の秦保言はたまたま次のようにいった。「眞君上仙はなぜ紙

銭を必要とするのか」と。その夜、夢の中に眞人があらわれ、次のように答えた。「此れは冥吏がそれをたよりとしているもので、我は必要としてない」と。そういうわけで、人々は皆紙銭を信じている」。

『夷堅志』（南宋）によると、「鄒智明が急に病気に患った。そこで僧侶に頼んで『孔雀明王經』を誦すると、孔雀が来て鬼を追い出した。鬼が鄒智明にいうには、「我輩は去るべきだが、多量の冥銭を焼いてくれ」と。それで使用人に楮幣を買わせて焚いたところ、諸鬼は皆去って行った」。「項明の妻の胡氏は、既に亡くなったが、その魂は相変わらず娘の所に来て、娘と一緒に寝る。しかも項明に次のように語った。「私の父の家がこわれてしまったので、新居を建てたい、それで金銭の援助を必要としています」と。そこで、すぐに数百束の紙鏹を焼いた。また、「銭が多くて運んでくれる人がいない」という。そこで二人の力士を書いて焚いた。そうすると胡氏の亡魂はとうとう去って行った」。……『天香樓偶得』に次のようにいう。「俗に紙の上に神像を書いて色彩を塗り、祭りが終わってから、それを焚化するのだが、これを甲馬という。此の紙を使って神に憑依されるものとするのである。馬に似ている」と。

『蚓菴瑣語』によると、「世俗の祭祀の時には、必ず紙銭甲馬を焚する」という。

以上長く引用したが、趙翼によって引用された文献のうち、他の学者によっても頻繁に言及されるのは、『封氏聞見記』の説である。これには、焼紙銭の習俗が、唐代ではなくて、もっと早く魏晋の時代に起源すると述べられている。唐代には、その習俗が一般に定着したものと考えられる。趙翼が集めた宋代以降の事例はとて多く、それらから宋以降に紙銭の盛行したことを知ることができるだろう。

唐代の話とされる事例を追加して次に紹介しよう。

『北京風俗図譜』によると、唐時代には紙銭が用いられたという記録がいろいろ残っているが、中では唐臨の『冥報記』巻中に李山竜という男が死んで地獄を見物したが、七日目に生き返って、冥土の話の皆に聞かせた。

「地獄では大きな釜に火が燃え、湯がたぎっていた。側には二人のものが、いねむりをしていて。彼が尋ねると、二人のものは「私たちは罪のむくい、この釜の湯にいられましたが、あなたが南無仏を唱えたお陰で、罪人はみな一日だけ休息することができ、疲れて寝ているところです」と答えた。（やがて大王の命令で彼は釈放されるが、三人の役人から贈り物をねだられる）。彼が家に帰ってみると、みな泣きながら葬式のしたくをしているところであった。彼は自分の遺体の所まで来ると生き返った。後に彼は紙を切り銭帛を作って、酒食とともに水際に持って行って焼くと、たちまち三人のものが現れて「約束どおりたくさん贈り物を下さって、大変有り難う」とお礼を述べた」（内田 1986：61）

この記録は、地獄の中の下層の役人が贈り物としての紙銭をねだり、受け取ったというモチーフを表している。このモチーフは趙翼の『陔餘叢考』「紙銭」の条で、南岳道士の夢に現れた眞人が冥吏すなわち冥界の下層の役人こそが紙銭を必要としていると述べたのと類似していて、唐代にこうした考え方があったことが知られる。

次に宋代になると、製紙技術の発達とともに、紙銭だけでなく、それ以外のいろいろな種類の紙製の冥器が大量に出現し、人々によって使用されるようになって行ったようである。このことについては、次の文献が参考になる。

時代の変遷とともない、紙製品に対する呼び方や使い方もそれぞれ異なる。例えば、北宋の代時に「装奩作」,「打紙作」,「冥器作」,「紙扎舖」と称される。『東京夢華録』の記載により、「七月十五日中元節の数日前に市場では冥器靴鞋、幘頭帽子、金犀緞帶、五彩衣服などが販売される。……又、高さ三、五尺の竹竿の一端を三つ足に割り、立たせて、上に灯窩を飾り、盂蘭盆という。衣服や冥銭を掛け、燃やす。……九月下旬には冥衣靴鞋、席帽衣緞が売られることは、十月朔日にそれを燃やすためのである」(潘 1993:1)。

宋代の趙彦衛が書いた『雲麓漫鈔』(巻五)には「古之明器、神器之器也。今以紙為之、謂之冥器」というように、宋以降、紙冥器は陶器、磁器製の冥器に代わって大量に使用されるようになったと考えてよいようである(鄭)。

三. 伝説

民間の説話では、紙銭を焼くようになる伝説にはいくつかの内容が語られている。

次に前節のような知識人の歴史的考証学に基づくのではなく、民間の口承に基づくと考えられる資料を検討しよう。

その1

「河南社旗県あたりの伝説によると、昔、蔡倫という人がいた。彼は紙を発明した。人々は彼が発明した紙を買い、文字を書く。それで彼の商売は繁盛した。蔡倫の兄の妻、慧娘はこの商売の利益が気に入り、自分の夫、蔡莫に紙造りの技術を学ばせるため、蔡倫の所へ行かせた。蔡莫が発売する前に慧娘は何度も「できたら早めに帰って来て下さい、早く商売したいから」と言った。そうすると、蔡莫は僅か三ヶ月で技術を学んで、それから帰ってきて紙屋を開いた。だが、造った紙はあまりにも粗末で売れなかった。部屋中、紙だらけになった。夫婦二人は山ほどの紙を見ながら、心配になってきた。

慧娘は夫より頭が良さそうで、紙を売るための方法を考え出した。彼女は夫と相談してから、夫に自分が言う通りにやってもらうことにした。

夜中、蔡莫が大きい声で泣き出した。近所の人々はそれを聞いて様子を見に来た。慧娘は死んで、しかも、棺桶の中に入れたのである。蔡莫は近所の人の前で泣きながら、一束の紙を棺桶の前で燃やした。「俺は弟の所で紙造りの修業をしたが、まじめではなかった。完成したものはひとつもなくて、売れない。お前はこれで息ができなくなり、死んでしまった。それはこの紙のせいだ。俺はこれを燃やし、灰にして、お前の恨みを解いてやろう」と言いながら、紙を一束一束と焼いた。暫くしてから、棺桶の中から「棺の蓋を開けて、私は帰ってきたよ」と慧娘の叫び声が聞こえた。回りの人々は皆驚いた。怖いながらも、棺の蓋をあけることにした。

そうすると、慧娘が起きて坐って「陽間の金は四海に通用するが、紙は陰間で商売できるのよ、

もし夫が紙を燃やしてくれなかったら、誰も私を帰してくれなかったよ」と歌った。「先ほどまで、私は鬼だったが、今は人間に戻った。私は陰間についた途端、すぐに臼を碾かせられた。非常に辛かった。夫は金を送ってくれて、鬼たちは金のためにお互いに争って臼を碾いてくれた。本当に金さえあれば、鬼にも臼を碾いてもらえるのね。判官にも金をくれと要求された。それで夫からの送金を沢山あげた。すると、彼は地府の裏門を開け、こっそり私を送り出したのよ」。

蔡莫は妻の話聞いて、分からないふりをし、「俺は金なんか送ってないよ」と言った。慧娘は燃やしている紙の束を指しながら「これはあんたが送ってくれた金だよ、陽間で銅銭をお金として使うが、陰間は紙で通用するのよ」と答えた。

蔡莫はそれを聞いて、また二締め紙を燃やししながら「判官よ、判官、貴方が私の妻を帰してくれたことに誠に感謝しています、今、また二絞めの金を貴方に送りますから、陰間にいる私の両親にも苦勞させないようにお願いします、金がなかったら、また送りますので、どうぞよろしくお願いします」と言った。

近所の人々はこれを本当のことと信じ、蔡莫が作った紙を買い、祖先の墓の前で燃やした。二日間経って、蔡莫の家に積もっていた紙の山はあっという間に無くなってしまった。(雪 1994 : 406 ~ 407)

その2

東北地方は土地が広く、人が少ない。必要とする日常生活品は殆ど商人が内陸から運んできたのである。ある年の冬、二人の黄紙商人が内陸からやってきた。この二人は兄弟であり、兄は張財、弟は張義という名である。二人は初めて関外の東北地方に来たので、関外の冬はそんなに寒いとは知らなかった。

この日、二人は紙を担いで、人里離れた、人煙のない荒野を進んでいる中に天気が急に変わった。一時間の中に大雪が降り、北風がピューピュー吹く。張財は三十才で、体も大きく、雄牛のような体力で、百キロの重さの紙を担いでも足もとはしっかりとて、飛ぶように走れるが、弟の張義は僅か十五、六才で、弱々しい体質だから、強い風に倒れそうな歩き方であった。

このような悪天候の中、張財はひたすら自ら急いで歩いた。急に弟のことが気になって、後ろを振り返ってみると、弟は雪の上に倒れ、凍死していた。弟の死体を抱いて声を張り上げて泣いた。そして目の前にある黄紙を見て「この黄紙のせいで弟が異郷で亡くなったのだ」と思った。彼は悲しくて、二担ぎの黄紙に火をつけた。あっという間に周りの空気が熱くなり、まるで春が来たように暖かくなった。張義の死体は火災から遠くない所に置いてあったために、火の暖かさにより、奇蹟的に生き返った。

ようやく旅館に辿り着いたが、兄の張財が自分で苦勞して担いできた二担ぎの黄紙はすべて烏有に帰したことを思い出して、病気になる、倒れた。兄の病気を早めに治すために、張義は次のような嘘の話を作った。「兄貴、もしあなたがその二担ぎの紙を燃やさなければ、閻魔王は俺を帰させてくれなかったのだ、信じないのか。俺が凍死した後で、二人の髪長い小鬼が来て、鎖で俺の首に鍵をかけ、わけも聞いてくれずに閻魔の殿に連れていかれた。閻魔王が殿の真ん中

に座って、牛頭馬面は両側に立ち、判官は死生簿をもって後ろ側に立っていた。その周りに大勢の悪鬼が現れた。閻魔王は「お前は内陸から来た張義か」と俺に聞くので、俺が返事をしてから、閻魔王は俺の一生では何の悪いことをしたのかを判官に調べさせた。この時、一人の小鬼が慌てて入ってきて「王様、王様、張義の兄貴が王様に数多くのお金を送ってきました」と報告した。俺はそこでは兄貴は金を持ってゐるわけではないのと思ったが、閻魔王は小鬼たちに「金を持ってこい、見せてみろ」と命じた、小鬼たちが「ハイ、コロショウ、ハイ、コロショウ」と二担ぎの華やかな紙を担いできた。俺はこれは兄貴の担いでいたものだなと一目で分かった。閻魔王は金を見るとすぐに態度を変え、優しく俺に「お前はまだ若いし、お兄さんは立派なもんだ、早めに帰きなさい」と言ってくれた。俺を連れてきた二人の髪長い小鬼も俺ににこにこ笑って謝ってくれて、俺を閻魔殿から外へと送ってくれた。それから、俺はわけが分からないままに目が醒めたのだ。兄貴、黄紙を燃やしたら、陰間で金になるぜ、不思議なもんだね」。弟の話聞いて、本当だとを思い込んだ兄は心が晴れて、病気も全快した。しかも、この話を旅館の泊まり客たちに伝えた。噂は広がって、代々に伝わってきた。その後、一人の頭の良い者が印刷のための板木を発明し、紙に模様を印刷し、紙銭を作った。そうして、人々は紙銭の発明にもなって、亡くなった親族に紙を焼いたら、あの世に金を届けられるのだと信じるようになった(雪 1994:408～409)。

その3

山東一帯では誰でも人が亡くなってから、百日忌、周年忌に墓で紙銭を焼くことを知っている。なぜ、死後には紙銭を燃やさなければならないのか。民間では次のような物語が広く伝わっている。

昔々ある所に、相手が自分よりお金持ちになることについて、負けたくないと思える二人がいた。二人とも自分がお金持ちになりたいと思って、お金をもうける方法はないかといろいろ考えた。最後に、藁や麦の草などを細かくして粗い紙を作った。二人は沢山の紙を二両の馬車に積み、あちこちに売りに行ったが、紙の質があまりにも粗末なので、何日経ても誰にも買ってもらえなかった。「何とかならないかな」と二人は紙が売れる方法について知恵を絞って考えた。やっと、一人が案を考え出した。翌日、二人は人がよく通る墓地に来て、仮の墓の側で一人が声を張り上げて泣き叫びながら、一枚一枚の紙を燃やした。段々とひやかしに来る人が大勢集まってきた。人々が興味津々に「誰か亡くなったのかい、なぜこんな所で泣くの」と聞くので、彼はわざと涙を拭いて、悲しそうな声で「俺の弟だよ、俺たちは故郷を離れ、行商に来たが、彼の魂は閻魔王の牛頭馬面に連れて行かれた。弟が「閻魔王が金ほしいと言っているんだ、特に俺が死んだ七日目と十四日目に沢山の紙を燃やしてくれ、陽間の紙は陰間では金なのだ、沢山燃やしてくれれば、俺の命は帰ることができるのさ」と俺の夢に託したから、俺が毎日毎日ここで紙を燃やすのは弟を帰してもらうためなんだ」と言った。人々はそれを聞いて半信半疑で「これは不可能だろう」「いやいや、本当なことかもしれない」「じゃ、その日に見てみよう」「そう、そう、またその日に見てみればいいんだ」などと言い、ひやかす人々は暫くしてからその場を去っていった。

ようやくその日がきた。人々は結果を知りたいために、大勢集まってきた。そして、正午になると、仮の墓の中から、本当に人の声が聞こえてきた。人々が墓の土を掘ってみると、弟を演ずる人が墓の中から出てきて、兄を演ずる人を抱きしめながら、嬉しそうな声で「兄貴、沢山の金で俺の命を買ってくれなければ、俺たちは再会することができなかつたよ」と言った。人々は皆それを固く信じ、この話は今まで広く伝わっている（雪 1994：410～411）。

その4

これは台湾に伝わるものであり、特に詳しい内容を持っている。

昔支那のある処に蔡倫という賢い人がいました。この人は紙を造って売っていたのですが、当時は今日の様な印刷術の発達した時代ではなかつたから、紙の需要が非常に少なくあまり紙が売れませんでした。それで売れない紙が家の中や倉庫に一杯になってしまいました。

賢い蔡倫はすっかり腐ってしまって、何か紙がどしどし売れるうまい方法はないものかと思案しました。しかしどう頭を絞っても良い考えが浮かびませんでした。

ある日、蔡倫は近所の人が死んだので、その葬式を見に行きました。その家では死者を悼んで、大変嘆き悲しんで居りました。蔡倫はそれを見て、死者が蘇生する様なことがあるならば、その家の人はどんなにか喜ぶだろう。恐らくその家の人は出来ないことをも願い、仮想的なことも考え、死者のためならどんなことでもするだろう、それが人情というものだ、と考えました。すると蔡倫の頭に商人的なずい考えが浮かび上がりました。蔡倫はひざを打って喜び、早速家へ走り帰って、その妻に言いました。

「私がこれから仮病して仮死するから、お前は近所の人達に知れ渡る様に、はげしく慟哭しなさい。そして家の紙を適当な大きさに切ってそれに銀箔を貼り、七日間続けて、出来るだけ多く焼きなさい。」

突然なことで、その妻は蔡倫の言うことがよく分からず、怪訝な顔をしました。蔡倫は妻が怪しむのを見て、すぐ説明して聞かせました。

「お前もよく知っているように、家の紙が売れないで、倉庫中に一杯です。それで家の紙を適当な大きさに切って銀箔を貼りつけ、これを陰間に通用する金だとするのです。死者に対して何かしたいのが人情ですから、私が仮死し、お前が七日も続けてその紙を焼き、そのおかげで七日後に私が蘇生したならば、家の紙も飛ぶ様に売れるでせう。」

妻は蔡倫の話聞いて、すっかり蔡倫の機転に感心し、もう一つの疑問を發しました。

「お前さんが死んだ振りをして、お前さんを棺桶に入れられないわけには参りませんでせう。」

「お前も馬鹿ですね。私を底なしの棺桶に入れるのですよ。そうすれば私は死ぬこともなし、近所の人達が居ない時には、御飯などを私に食べさせることも出来、何かするにも便利ではありませんか。それから七日目に近所の人達が沢山集まった頃を見計らって、私が内側から棺を叩くから、その時には蓋をあげなさい。」

夫妻の間に色々打合せがすむと、蔡倫はすぐ仮病し、二、三日の間に楽しく仮死しました。妻は言われた通り、豫め用意して置いた底なしの棺桶の中に蔡倫を寝かせ、大きな声を出して、は

げしく泣きました。その泣き声を聞いて蔡倫がほんとうに死んだものと思い、近所の人達が沢山集まってきて、一緒に嘆き悲しみました。

蔡倫の妻はまた用意してあった紙をどしどし蔡倫の足もとで焼き始めました。近所の人達は蔡倫の妻がどうして紙を焼くのか分からないから、その訳をたずねました。蔡倫の妻は泣きながら、それに答えました。

「ご承知の通り私たちは非常に貧乏です。わたしは良人がこんな貧乏の中に死んでしまったのが可哀そうです。それで此の紙を焼いて、良人が死んだ後でも陰間で貧乏しないようにと思ったのです。」

それから蔡倫の妻は近所の人達に手伝って貰って棺桶の蓋に釘を打ちつけ、七日間紙を燃やし続けました。そして何とか云ってはお葬式を出しませんでした。紙の灰がほんとうに山のようにうず高くつもりました。親切な近所の人達は時々蔡倫の家に来てはその妻を慰めました。蔡倫の妻は近所の人達が居ない頃を見計らっては、お茶や御飯を進めました。

やがて七日目になると、頭七と云って近所の人達がまた沢山集まってきました。一番人が沢山集まった時に、果たして蔡倫は棺の内側から音を立てて唸り出しました。人々は顔を見合わせて驚き恐れしました。その妻は狂喜して、泣きながら人々に蓋を開けるように頼みました。人々は仕方なく棺蓋をあけてやりました。すると蔡倫がむつくと立ち上り、棺からよろめき出しました。人々は蔡倫が七日間も死んだ後で奇蹟的に蘇生したのに、どよめき、眼を見はり、殆ど信ずることが出来ないぐらいでした。しかし実際に蔡倫が眼の前に生きて居たので、人々は蔡倫を寝臺に寝かせました。

人々は不思議に思いながら、漸く驚きから眼醒めて一斉に蔡倫とその妻に蔡倫の蘇生を祝いました。そしてこのようなさはぎをよそに蔡倫はしばらく呆然とした様子で黙っていましたが、人々が静まると夢見る様にたはごとを言い始めました。

「自分はいま何処に居るのでせう。あゝ、私は生き返ったのですね。有難いことです。有難いことです。……皆さん、私は長い長い旅から帰ってきたようなものですね。私は遠い、あの世と呼ばれる陰間まで行ったのですから。ほんとにまた皆さんと会えて嬉しく思います。」

それから蔡倫は近所の人達の一人々々の顔を見ながら、自分が行ってきたと云う陰間の物語りを始めました。牛頭馬面の先生に連れられて一緒に陰間まで下ったことや閻魔王に会ったようなことをまことしやかに語るのです。勿論最後に妻が山のような沢山の金を惜しげもなく送って来て呉れたから、何の不自由もなく旅が出来、また余った沢山の金を陰間の神神様に貢ぐことも出来たので、こうしてまた帰らして頂けたのだと結びことを忘れませんでした。

蔡倫が陰間に降りてまた蘇生したことが忽ち大変な評判になりました。それが近在の村々ばかりでなく、遠くの村々までも、まるで風のように有名になりました。人々は蔡倫のからくりを真実のことだと信ずるようになりました。

かくて蔡倫の奇蹟があつてからは、遠近を問わず、人々は死者があると死者に出来るだけ多くの金を送ろうと競って蔡倫の造った紙を買うようになりました。また後には神様や佛様を祭る時

にも紙を使うようになりました。そして蔡倫の思った通り紙が飛ぶように売れたので、蔡倫はとんとん拍子で金持ちになりました（巫 1942）。

ちなみに4番目の伝説の内容は民間では一番内容が詳しく流通も広いものと言われている。

以上を以て四つの伝説を取り上げたが、どの内容でも陰間の閻魔王に金を要求され、陽間の紙を燃やし、陰間で金になり、それで命が蘇るという話であった。引用した伝説のその1、その3、その4は、紙を作ったが、売れないので何とか売ろうとしている。陰間では紙が金として通用するので、命さえ買い戻せるという説を思い付き、主人公ないし妻、または友人が死んだふりをして、紙銭の力で再生するトリックをやって成功させる点で共通している。ただし、伝説その2は、本当に弟が死んだことになっている点がやや異なる。いずれにせよ、紙銭の有効性について実は仕掛けられたウソの演技をして、人々はだまされることが述べられているのは興味深い。これは民間において、紙銭は実は仮空のことがらであると皆が認めていることを反映しているのかも知れない。しかし、紙銭が虚構であることを暴露しながらも、それを信じる人が大勢いると語られているのである。つまり、これらの伝説は、生き生きした言葉で、紙銭が虚構であってもなお止められない民衆の心情を伝えていると考えられる。金で命を買うことができるという観念がなぜあるのかについては、大変重要な問題なので再び第四章で探求することとしたい。

第二章 現在において使用されている紙製品の概要

台湾の民間においてよく使われている紙製品は、特定の鬼神やいろいろな靈魂に捧げる際の意味によって、その種類と数量などが南北各地方の習俗ごとに少々異なっている。本章では、台湾南部の台南市内に住む主婦や寺廟の関係者、紙製品を製造販売する職人・商人から聞き取った内容に従って、現在民間で通用している紙製品の種類、それぞれの特徴と使用目的を整理したい。

第一節 種類と使用目的

一. 金紙

すでに見たように、台湾の民間の宗教信仰において、神仏や死者・雑鬼を祭るために、金銀紙を燃す習俗がある。神仏には金紙を、雑鬼・死者には銀紙・紙銭を焼いて送るというように使い分けられる（註1）。特に金紙には様々な種類があり、対象によってそれぞれ特定の使い方と意味がある。

現在民間で通用している金紙は主に頂極金、太極金、天金、壽金、福金、中金、刈金、盆金、九金の九種類がある。それぞれの特徴と使用目的は以下の通りである。先に次のことを断わりたい。以下の表でまとめる内容は、1997年3月と9月の二回の調査によるものである。調査協力者は次の方々である。主婦：蘇麗琴（48才）は資料整理に協力していただいた。インフォマントは以下の方々である。左藤糊紙製品店の洪銘宏さん（38才）、金銀紙銭問屋の黄文賢さん（58才）、玉皇大帝廟事務員の蔡能木さん（56才）と呉文雄さん（20才）、東嶽殿事務員の王さん（58才）。

文献としては主に『全国佛刹道観総覧』玉皇上帝専集第三冊（台湾省議會洪性榮研究小組 全国寺廟整編委員會編 1986：838～861）を参照したものである。

名称	特徴と別称	使用対象
頂極金 (写真1)	金箔に「叩答恩光」と書かれている。 最高級の金紙。 「百足」, 「天公金」 「大太極」とも言う。	玉皇大帝専用
太極金	「中極金」と「財子壽金」 (三太極)の二種類	「中太極」→三官大帝 「財子壽金」→南北斗神君
天金 (写真2, 6)	「天金」「尺金」 「大九金」の三種類。	玉皇大帝或いは三官大帝の部下 「改運」の儀式にも使う。
壽金 (写真3) 福金	福祿壽三神の模様が 印されている金箔を貼る。 一束は百枚である。	南北斗神君, 土地公, 一般神佛。 金紙に引火する際に使う。
	「土地公金」とも言う。 壽金にはほぼ似ているが 福祿壽三神の模様が 印されていない。	壽金と同じ。
中金	「中仔金」とも言う。	一般の神明を祭るために使用。
刈金	「刈」は金, 銀紙の上に 貼ってある錫箔の大きさを 指す。昔「刈金」と書いて 三六刈金と読む。 大箔金, 中箔に分ける。	小神, 山神を祭るために使用。
盆金	紙の上に針穴がある。	難産死の葬送儀礼に使う。
九金(写真4)		祖先, 外魂(陰間に専用)。

二. 銀紙

銀紙の分類は金紙に比べると、比較的簡単である。基本的には大銀, 小銀の二種類がある。台湾の北部地方では再びそれぞれを大箔, 小箔に分け, 計四種類になるが, 南部地方では大銀を大箔, 中箔, 小箔銀に, 小銀を大透, 二透, 中透銀と名づけ, 計六種類となる。

名称	使用目的と対象
大銀 大箔銀 中箔銀 小箔銀	祖先を祭る時に使うが, 大箔銀は功德の儀礼にしか使わない。
小銀 大透銀 二透銀 中透銀	幽霊野鬼を祭るために使用。

(銀紙は写真7参照)

三. 紙銭

紙銭は「楮銭」,「楮鏹」とも言う。「楮」はもともと製紙の原料で,「鏹」は銭を貫くためのふしいとである。陽世の貨幣を真似し,鬼神を祭る時に用いる。主に以下の三種類がある。

名称	特徴	使用目的と対象
金白銭	土灰, 黄の二色を一組とする。 黄色のは「紙頭」とも言う。	神佛の足元に踏まれる動物にあげる小銭。壽金と一緒に引火する用ため, 符を書くため, ケガレを追い払うために使用。
庫銭	中は粗末な黄紙で 外側は白紙で包装し, 「道經師三寶封」が印される。 死者が冥界で使用する紙幣。	葬式, 忌み日, 犯沖に使用。
篙銭 (写真42)	黄色と五色の二種がある 五色: 緑, 紅, 白, 黄, ピンク	黄色→天公を祭る, 建醮用, 普渡用。 五色→陰間用, 東西南北中央の五神を祭るために使用。 八家将, 大爺, 小爺が帽子のわきの所に飾るもの。

四. その他の紙製品

古代の帝王の場合ように生きている人間や金銀財宝, 生活用品などの実物を死者とともに随葬することは, 今はもうない。あるとしたら, 金, 銀, 玉などの飾り物ぐらいだけであろう。ところが, 死者に様々な生活用品や金銭などを送ろうとする考えは変わっていない。しかも, 家屋から始まり, 金山銀山, 使用人, 現代化された生活用品, 乗り物, 娯楽道具などにおよぶ, 死者が用いるあらゆる物品は殆ど紙製品で代用されている。

以下で取り上げる種類は一般家庭行事や廟で行われる儀式或いは葬送儀礼でよく使われる紙製品である。

名称	特徴	使用目的
五色紙	五色というのは 柄の布を指す。	清明節墓参り用。 女神を祭るために使用。
床母衣 (鳥母衣とも言う) (写真9)	雲などの図案がある。 衣料を示す。丸めで使用。	女性にかかわり, 出産, 生育を祈る 七娘媽, 註生娘娘, 床母を祭るために使用。
經衣(写真41)	衣服を意味する。	鬼を祭るために使用。
本命銭 (写真37)	小人或いは紙幣の図形が印される。 百種類以上ある。	補運や解運の儀式に使用。

往生銭 (写真8)	「往生神呪」「極楽世界」などの文字と蓮花図形が印される。	葬式において祖先を超渡往生させるために使用。
雲馬 總馬	轎夫、雲、馬の模様が印され、雲馬、總馬の文字が記される。	神を迎え、神を送る乗り物である。
甲馬	神馬、申胄	神の兵馬、戦士用。廟の「賞兵」用（王爺の兵馬をねぎらう時「賞兵」という）。
人形 (写真22)	金童玉女	葬式において使用。死者を天堂に案内する小神である。
魂身(写真22)	死者の性別で形が異なる。	葬式用。これは死者の身体を示す。
乗り物	紙轎、紙馬、紙車など。	葬式用。
幢幡(写真27)	竹竿に傘状の紙を飾り、男は緑色、女は黄色である。	葬式用。
紙厝(写真13)	紙で作った家屋。	死者が陰間で居住する家屋である。葬式、祖先祭祀、犯沖、醮厝換厝に使用
麻燈(写真21)	喪家で飾る様々の燈の総称。	葬式用
七娘媽亭 (写真38)	約二尺高の紙亭。	七娘媽の誕生日用（成人式用）。
山岳	約三尺高の金山、銀山、観音山など。	普渡（註2）、建醮用。
燈座	別称：天公座。大香爐状 一組：本座、南斗座、北斗座、衆神明座からなる。	拜天公、謝平安、普渡、建醮用。
四大元帥	約八尺高の四大将官、四騎。 (註3)	普渡、建醮用。道壇の守護神である。
四金剛	約六尺高の四神。	建醮用。
鑽	約五、六尺高の円筒状。	難産死、溺死の亡魂を超渡するために使用。
大土爺	約三尺高の山神、土地公、鬼王の像なども含む。（註4）	普渡、建醮用。大土爺は孤魂野鬼を管理できる神である。
寒林院	大土爺の側に置く官魂の休憩室。	普渡、建醮用。文人、学者の亡魂が休む部屋である。
同歸所	一般の靈魂の休憩室。	普渡、建醮用。男女を分けることあり
沐浴亭	風呂場。	普渡、建醮用。
五泉廟	戦死者の靈魂を祭る廟	普渡、建醮用。
花燈	花鳥、人物、魚龍など。	元宵節（正月十五日）に飾る。
戲仔棚(写真43)	芝居舞台	中元節に家庭で「拜門口公」（好兄弟）の時に芝居を見せる。

なお、補足説明として、セットにして販売されている紙銭が多いので、そのことについて説明しておきたい。

台南市の天壇(天公廟)には、天公祖に捧げるために使用の金銀紙と花をしつこい程熱心に売っている16才の男の子がいて、その子から100円で1セットになっている「四配金」を買った。セットの中身は沈香(1束)、天公金(1)、寿金(5)、三界公金(1)、補運金[天庫(10)、補運銭(5)]がある。男の子の説明によると、四配金と言われるものは天公金を天公祖に、寿金を南北斗神君に、三界公金を三官大帝にそれぞれ捧げ、補運金は「進銭補運」(お金を寄付して運を補うこと)の役割を果たすという。

臨水夫人廟で販売される金銀紙の100元のセットの中身は沈香(1束)、九金(2)、福金(1)、鳥母衣(4)、飴玉(1袋)がある。

金銀紙問屋の黄文賢氏の話によると、天庫、地庫、水庫は天銭、地銭、水銭とセットで使う(写真10)。天庫、天銭をセットにしたら、冥界で100万の価値がある。天庫のセットは天府に、地庫のセットは閻魔王に、水庫のセットは水晶宮に焼いて捧げる。保運の儀式を行う時にこれらを燃やさなければならないという。

註

- (1) 『全国佛利道観総覧』(1986:842)によれば、金銀紙の材料はほぼ同じく粗末な紙であり、製品の大きさにより、正方形か或いは長方形になり、両者は紙の上に金箔或いは銀箔を貼ることにより区別される。金紙一枚と銀紙一枚の価値の差は約10対1である。
- (2) 笠原政治、植野弘子氏(1995:106~107)によれば、「普度」とは鬼に対して共同で供物を捧げて祭祀を行う儀礼である。鬼月だけではなく、大規模な道教の儀礼である「醮」の際にも付随して行われる。豪華な供物と「紙銭」などが並んでいる。儀式の最後には、紙銭が焼かれ、鬼はあの世の金も手に入れる。
- (3) 『全国佛利道観総覧』(1986:859)によれば、四大元帥:温元帥—温皇者、青い顔、獅子に乗る。康元帥—康妙威、赤い顔、麒麟に乗る。馬元帥—馬子貞、白い顔、白馬に乗る。趙元帥—趙公明、黒い顔、黒い虎に乗る。
- (4) 左藤糊紙製品店、洪銘宏氏の話によると、高さ46尺(1尺=30センチ)まで作れる。普渡公と別称される。仏教と道教の儀礼ともに使う紙製品である。

第二節 製造の実際

次に紙製品製造の実際について、製造をしている人から聞き取りをすることができたので、紹介したい。

(1) 紙糊店

インフォーマントは洪銘宏氏で、聞き取りは1997年3月8日に行った。

台南市「左藤糊紙店」は台南市中区の東嶽殿のすぐ隣の位置である。店主は洪銘宏氏(38才)

である。紙糊店というのは紙製の祭祀用品の注文を受けて製作と販売をする商店のことである。洪氏は13才から父親のもとで糊紙製品の作製方法について修業し始め、この業界ではすでに25年の経歴を持つベテラン職人である。と同時に東嶽殿管理委員会の現役の委員を担当している。自分の店を「左藤紙糊店」と名づけた理由は、氏の父親が日本の昭和天皇の顔に似ていて、若いときから友人に「さとう」というニックネームが名づけられたからだそうである。現在、奥さんと二人で糊紙製品を作っている（写真13）。

氏が注文を受けて作るものは主に人物、動物と紙層の三種類である。人物と動物は廟の做醮つまり大規模な祭礼の際に使用される元帥・座騎などもあれば、葬式用の金童玉女、魂身、乗り物などもある。紙層は、死者が陰間で居住する家屋のことである。年間を通じて一番多く注文される糊紙製品は葬式用の紙層である。一年間に平均約200～300座を製作するが、殆ど毎日誰かが必要とする状況であるという。大きさ10尺×6尺（1尺＝30センチ）の三階建ての西洋式紙層を完成させるのに二人で作業する場合は約一週間かかるという。

洪氏の話によると、1997年現在、台南市内にはおよそ十三、十四軒の紙紮品店がある。これら他に三軒の紙紮品用の部品専門店がある。紙層の材料は主に細い竹と様々な色柄の紙であるが、中に飾られる家具（机や椅子）（写真14、15）や人形の頭、窓枠、ライト、木、花などのものは殆どプラスチック製品である。氏が言うにはプラスチック製の部品は燃やす時に環境によくないのだが、プラスチック製品のコストは安いし、作る時、組合せに便利である。自分は使いたくなくても、別の店との値段の競争に負けてしまうから、やむを得ず使用しているという。

「台南の人は自分の店を持ちたいものが多い。一週間から二週間ほどで紙層の作り方を学んで、もうすぐに店を開くようになり、安い値段で勝負する。曾て、自分の別荘の形のままだに紙層を作りたいという注文があった。それでわざわざ別荘地へ行って、28枚の写真を撮って、三日間掛かって紙層の設計図を描いた。製品が完成した一週間後に、別の店のサンプルにも同じものが売り出され、しかも値段はこっちのより安かった。こんな時はほんとうに頭にくる。今は、自作のオリジナリティーのある製品を焼く前には、絶対に他の人に写真を撮らせないようにしている。

台南の廟の大きな做醮儀礼の仕事で落札する時に、台北の職人を雇う。台北の職人の技が細かいからである。彼らは自分の店を開いていない。契約により日給で仕事をする。一日で15000元になる。これは大変高い値段である」。

洪氏の話によると、葬式用の紙人形で主に使われているのは金童玉女、卓頭嫻（使用人）、魂身の三種類がある。それらに供える物はそれぞれ異なる。金童玉女には紅亀を供え、卓頭嫻には小さな杯にご飯をのせ、側に一本の空心菜が置かれる。魂身にはご飯とおかずが供えられる。ところが、死者が亡くなってから七日目（「做頭旬」）までは、死者は自分が亡くなったことが未だに分かってないし、ひたすら黄泉の国へと向かって道を急いでいる。だからこの時は、死者は供え物を食べていない。そして遺族は死者が食べに来ないと知りながら、相変わらず一日二回（午前7:00～8:00と夕方4:00～5:00）、死者のために食事を供える。亡くなっても、生きている間のように孝行をする、すなわち「事死如事生」（死者につかえるのに、生きている者につかえ

るようにする)のようにしてあげたいのだろう。遺族は死者に一日二食しか供えない。これには、残る一食を子孫が食べる、或いは死者が一食を子孫に残すから、一日三回でなく、二回でよいのであるという意味がある。

七日目に「倣頭句」といって頭句をする。「孝生句」(息子句)とも言う。死者に「開魂路」(光明の路を開く)をする。三牲(豚、鶏、魚)を用意しなければならない。「開魂路」の儀式では豚の頭が不可欠な供え物である。昔の人が言った俗語「在生無人拜、死後再拜猪頭」には、前の句では親不孝の人に対して皮肉なことを言っているが、後の句では死後に必ず豚の頭を供えると言うのである。

「倣頭句」の日に霊卓には七碗の団子汁を供えるが、箸は置かない。死者が亡くなって七日目まで、自分が亡くなったことを知らず、七日間ともご飯を食べなかったから、死者はお腹がすいているはずである。そこで死者が手で団子汁を取ろうとすると、団子の粘りけで、指の爪が全部落ちてしまう。不審に思って、土地公にわけを聞きにいった。そうすると、土地公が「あなたは某日の某時に亡くなった」ことを教えてくれた。それから、土地公は死者を「望郷亭」まで連れて行き、そこで自分の子孫が一堂に会し、自分のために葬式を行っているところを見た。それで自分が死んだことがはじめて分かったという。

昔、紙厝は死者を埋葬してから、自分の家の後ろの空地で焼くが、今はほとんど、葬儀屋の都合で出殯の前日に焼いてしまう。これは習俗の本来の意味に背いているという。なぜなら、人が死んでから出殯まで「喪」を行い、悲しいことであるが、死者を埋葬した後、「喪」が終る。「喪」がすでに終わってから、今度は次に、「用喜除喪」(喜ぶことを以て、喪を取り除く)のつもりで、「入厝」(新居お祝い)の儀式を行うのである。「入厝」の儀式を行う前には喪服を脱がなければならない。女性遺族は祝い事を行う時と同じく、髪の上に赤い春仔花を飾る。しかも、六或いは十、十二の品物を紙厝の前に供える。この十二の品物は台湾語の発音でみな子孫の繁栄を祈る意味を表すものである。十二の品物は以下の通りである。それは鑄(セエー、「生子」の生と同じ発音)、炭(トォア、蔓延と同音)、釘(丁、男の子と同音)、銀(錢と同意)、鳳梨花(旺盛の意)、九茶芋(繁殖力強い意味)、紅圓(甘い餡入れた赤いおもち)、發糕(丸い形のカステラで、發財の発と同音)、鱈乾(干しするめの一種、鱈と存財の存と同音)、箍桶蔑(鉛線)、花豆(生殖力の強い意味)、五穀(豊作の意味)などがある。六或いは十の品物を用意する場合はその中から重要なものと思うのを選べばよいという。

更に洪氏が接した紙厝の注文に関わるいくつかの物語りを紹介する。

その1

「日本植民地時代或いは戦後まもなくの頃には、経済的に能力があまりなくて、親類が亡くなった時に、紙厝を燃やせなかった。最近になって、家族の状況がどうも順調ではない。そして、しばしば亡くなった親類が住むところが無い、或いは住む家が壊れたり、雨もりしたり、お金がほしいなどの夢を見た。それで夢の内容について、神様や童乱、牽亡を通して、死者のしてほしい

ことを聞いた。その結果はほとんど紙曆と紙銭を焼いて送った場合が多い。」

その2

「ある日、台南県歸仁郷に住んでいる、およそ50才の婦人が僕の所に紙曆を注文しに来た。彼女が言うには、ある時亡くなった夫が「住む家が壊れた、雨もりした。地獄廟の隣で家を買ってくれ」という夢を見た。彼女は三日間、台南市内で地獄廟（デェガクビョウ）という所を捜したが、誰も地獄廟を知らない。ある人に嶽帝廟（ガクデェビョウ、東嶽殿の別称）だったら、その隣には糊紙製品店があると教えてもらった。僕は彼女に「あなたの夫は僕を知っているかな」と聞いたら、彼女が夫は農業をやっているから、台南市内にはめったにこない人だという。彼女は一番高い値段の紙曆を注文したいというが、僕は異なる値段の三種類の紙曆から一つを選べばよい、帰ったら、旦那さまの位牌の前で擲筭して占って、どれがいいかと聞いて、決めればよいじゃないかと勧めた。結局、中間ぐらい値段のを注文してもらった。」

その3

「もう一つの話のだが、父親の葬式をやり終ったばかりの女性が紙曆の注文に来た。夢で父親が家の壁が壊れたという。この女性は自分がその紙曆を燃やす直前に、たしかに紙曆のどこか一カ所が破れたのを見た覚えがあると言った。僕はそうならば、紙曆はまだ新しいので、もう一軒を送るのはもったいないから、家を修理する職人の紙人形を送ればよいと勧めた。」

その4

「僕は東嶽殿の委員をやっているから、たまに人が亡くなった親類の夢を見たことを相談にくる。神さまや童乱、牽亡に聞こうかなと僕の意見を求める。僕は、まず家で親類の位牌の前にお香をあげて、これから自分が死者にしてあげたいことが、例えば紙銭や紙曆を送ることであるなら、死者に対して、私はこれから紙銭と紙曆をあなたに送りますよと報告しなさい。それから廟に来て金爐で疏文と紙曆を焼けばよい。神の像は木で彫刻されたもので、亡くなった親類の位牌も木で出来たものだから、同じく話を聞いてもらえるのさ。しかも、神様も人間が亡くなってから神様にされたのだから、これは気持ちの問題だよ。わざわざ、お金かけて童乱などを頼まなくてもよいと僕はそう思う。」

その5

「ある婦人は何年か前にある土地を買い、その地で家を建てたが、建物は人に貸したまま、自分はそこに住んでない。最近はその家売りたいと思っている。何回か買い主が現れたが、なんらかの原因でなかなかうまく売買が成立できなかった。彼女はたまたま友人に家がうまく売れない話を言ったら、その友人が言うには、もしかしたら、あの土地にはケガレがある、家が売れたら、「彼ら」（鬼魂）も「無厝鬼」（家なしの鬼）になるから、必ずうまく売れないように邪魔するのだと。「厝換曆」（紙の家を焼いてあげて、本当の家と交換してもらう）をしないとうまくいかない、といったようだ。こういう場合は紙曆の中に魂身を置かない（写真16）。」

以上の物語から、台南の人々の間で、紙製品がよく使用されている事が明らかに知られると思う。

以下の表は「左藤紙糊店」でよく作られるものである。この表によって、台南市内の紙糊店では、どのような紙製品を作っているのか、販売価格はいくらか、用途は何であるかを理解することができるだろう。

種類	特徴と名称, 大きさ	値段 (台湾元による)	使用目的及び説明
人形	金童玉女。	200~4000 (一組)	葬式用。
魂身	死者の性別で 形が異なる。	200~2000	葬式用。
乗り物	紙轎。 紙車。 紙馬。	200 50~1500 3000	葬式用。
幢幡	三魂七幡。	1500	葬式用。
麻燈	喪家に飾る大門燈。	600 (二個)	葬式用。
七娘媽亭	約2尺高の紙亭。	1500 (小), 2000 (大)	成人式用。
山岳	普渡山。	2500~10000	普渡用。
燈座	天公座。	1000 (小, 一組) 2500 (大, 一組)	拜天公, 謝平安用。 建醮用。
四大元帥	約8尺。	18000 (元帥・座騎一組)	建醮用。
四金剛	約6尺。	15000 (四個一組)	建醮用。
鑽	約2, 2~3尺 の円筒状。	200	血鑽: 難産死, 事故死。 水鑽: 溺死。
大土爺	普渡公。	5000 (3尺高)	普渡, 建醮用。
寒林院 同歸所 沐浴亭	官魂の休憩室。 一般の靈魂の休憩 室。 風呂場。	1500	普渡, 建醮用。
花燈	花鳥, 魚龍など。	400~ (注文により十万元以上のものもある)	普渡, 建醮用。
紙厝	紙で作った家屋。	2000 (3尺×2尺×2尺) ~ (注文により三十万元以上のものもある)	葬式用, 祖先の 靈魂に要求される 時, 厝換厝, 犯沖。

(2) 紙錢工場

訪問先は高雄県湖内郷の「思親紙行」で、インフォーマントは陳福城氏である。聞き取りは1997年3月14日に行った。

陳福城氏（40代）によると、もと建築業をしていたが、七年前から紙銭工場を経営し始めた。こちらの方がもうかるからである。主に製造加工しているのは、葬式用の庫銭もあれば、紙銭を入れる小さな箱も作っている（写真17, 18）。ロールの紙を裁断することなども行っている（写真19, 20）。

氏の話によると、粗製の紙を作る過程では、工業廃水の汚染が深刻な問題となるから、業者は廃水を処理する設備を整えなければならないが、費用が高いため、それで止めた業者も少なくない^(註1)。紙銭工場も輸入する紙の半完成品を使う方がコストが安いという。

巨大な倉庫には三種の品が積み上げられている。ベトナム製、中国大陸製^(註2)、台湾製の庫銭である。ベトナムと大陸からは、粗製の紙銭を白い紙で包んだ半完成品を輸入している。内部の紙の品質は、大陸のものが最低の質で、次がベトナムのもの、一番よいのは台湾のものである。価格も台湾のものが一番高い。

陳氏から聞いたところによると、道士は民衆と業者の間に立って、庫銭を買うのを手伝い。民衆は舶来品の庫銭がいいと思うので、道士はベトナム製の庫銭を工場から買い取って、民衆に使用させる。この時に、価格は台湾製の高い価格をもらって、実際はベトナム製の安い庫銭を渡す。こうすると、差額が道士の手に入ることになるのである。このような売り方をする道士も存在するという。

註

- (1) 黄正璋その他（1996）によれば、台湾苗栗県竹南鎮中港という所は、曾て台湾では最大の金銀紙製造地である。近年来、環境保全する意識の台頭によって、業者は廃水処理設備の費用に伴う廃業が多い。
- (2) 丸井氏（1919：190）によれば、紙の原料は日本植民地時代から輸入品もあった。

第三章 事例研究

第一節 葬送儀礼

葬送儀礼にはその民族の他界観や靈魂観が反映されている（志賀 1993）。台湾の葬送儀礼は死者を埋葬或いは火葬するまでの殯葬儀礼と死者の靈魂を超度するための功德儀礼に大別される。但し、両者の儀礼内容は重なることも多い。

事例① 殯葬儀礼

日時 1995年7月21日～8月1日

場所 屏東市復興路，蘇府李老太夫人（享年77才）

葬送儀礼で使った紙製品をまとめると、以下の種類がある。(1) 紙轎と紙轎夫、(2) 幢旛、(3) 紙厝、(4) 銀紙、(5) 庫銭、(6) 蓮花金、(7) 買路銭などである。拙稿（蘇 1995）と一部重なるが、自ら体験したことでもあり、大変重要なのでやや詳しく紹介しよう。

(1) 紙轎と紙轎夫

7月21日、亡くなった当日の夜に使用。家の門の前の所で銀錢で囲んでから、焼いた。一説によれば、天に送って死亡を知らせるためである。もう一説では、この轎に死者が乗って、あの世へ行くとされる。轎夫に向かって、「しっかり担いで行ってください」と土公仔（葬儀社の人）が声をかける。弟が長孫なので焼くのを手伝った。

(2) 幢幡

7月25日に準備され、霊卓の側に置いてある。竹の棒で作られ、上に葉っぱがついていて、黄色と白色の布が傘状になっている。その真ん中から、長さ三尺二寸、幅三寸七分の白い布がぶら下がっている。この白布は三魂七魄を表すという。

幢幡は死者の靈魂を呼ぶために使う。幡の右側には「金童が西方の地に接引する」、左側には「玉女が（案内すれば）随即到極楽の邦に（到る）」とある。7月27日～31日の間、做功德の時に、例えば法師（僧侶）が、死者の靈魂を呼ぶたびに、また子孫が死者に贈り物をする時、死者を霊厝に入れて新居祝いをする時、紙厝を焼く場所まで、長男が幢幡を持っていく時など。多くの場合において、法師がこれを持って振った。8月1日、火葬場から帰ってきてから、喪服などのものと一緒に燃やす。

(3) 紙厝

1万3千円で作成。葬儀社の人が見本を持ってきてくれて、その中から選んだ。選んだ基準は費用による。祖父が「すぐ焼いてしまうのだから、あまり値段が高すぎるのはよくない」と言うので、家族はこの意見を重視した。

紙厝は細竹と紙で作っており、高さ約2mで、外側は鮮やかである。古式の二階建て家の形である。門の所に「孝思堂」とある。家の庭には揺銭樹、自動車、四人の使用人、バイクがある。家の一階には、冷蔵庫、机、椅子、テレビ（大型で、画面に女性が映っている）、バスタブ、ガス台、洗濯機、ベッド、電話などがあつた。二階の真ん中の応接間に、亡くなった祖母の紙人形があり、満足そうな様子で座っている。

土地の売買契約書（ピンク色の模様がついている）は紙厝の中に置いてある。残念ながら、その売買契約書の写真は鮮明でないが、およその内容は契約人（つまり売り人）は張堅固、その土地は、揚州府都市頭太陰山脚に位置しており、家族が買って家を建て、死者が住み管理することになっている。なお、後に台南市の同類のものがあるので示したい。

7月30日に祖母の「入厝」（新居祝い）儀式を行う。この儀式では紙厝の前に水、発糕、紅圓、米を供え、法師が紙厝の契約書に住所、父兄弟4人の名前を記入する。家族は紙厝の前に跪き、法師は幢幡を振り回して招魂する。契約書の文面と家族全員の名前を読み上げる。祝いの言葉を法師が述べる。祝いの言葉には、家族は「有（はい）」と一つ一つ大きな声で答える。最後に次女が家族を代表し、「阿娘（お母さん）私は△△です。家の売買契約書をここに置きます」と言いながら、紙厝の二階の祖母の人形の側に置いた。この時は、家族全員の悲しみが込み上げてきた場面であった。

7月31日に功德の儀式が終ってから、紙曆は庫銭と一緒に焼かれた。

洪氏から台南市で使用される紙曆の契約書を貰った。契約書の全文は以下の通りである。

(原文)

陰有陰司陽有陽府陰陽二路各有主
立賣杜絶盡根曆，契字人武夷王，自有地基一
所，座落土名在鄭都山下，東西南北抽出橫直，
各 丈，四至明白為堺，今因乏銀費用，外
托中引，就向與陽間報恩情 等
厚報恩為兒女，厚報情為朋友情人
出首承買，三面言議着下，時價銀 大圓，其
銀將中交訖，願將地基隨踏交付銀主，請陽間
小匠起蓋魂曆一座古式(洋式)房屋乙幢
內帶男童女婢・家器什物在內，交付亡過
顯考 府 翁乙位正(顯妣 氏 娘乙位正)魂儀，收入
居住掌管，不許外魂爭奪阻障，如有外魂爭奪
阻障，武夷王自出頭抵障，不干銀主之事，此係
二比甘願，各無反悔，恐口無憑，今欲有憑立，賣
杜絶盡根曆契一紙，付亡為照
即日同中，見收過契面銀 大圓完足，再照，

三宝殿前給出憑印契 為中人 土地公 存
知見人 李定度 存
契字人 武夷王 存
代書人 毛筆成 存

天運 年 月 日立杜絶盡根曆

(意識)

(土地付き)家屋を一括売買するについて、契約人の武夷王(註1)は、自分で土地を一カ所所有している。(その土地は)鄭都山の麓にある。その縦横の面積と四方の区画ははっきりしている。今、(武夷王は)金が無くて費用に困っているので、仲介人(土地公)に頼んで、陽間の(死者に報恩・報情すべき)親戚の某に対して、某の名義で武夷王の土地を買い受けるについて、売人(武夷王)、仲介人(土地公)、買人(陽間の某)の三人で購入契約を決着した。その価格は時価銀幾大圓である。その銀は仲介人(土地公)に渡し終わった。その土地はすぐに足で実地に測量して銀主(陽間の某)に引き渡した。(陽間の某は)陽間の職人に頼んで、古式(或いは洋式)

の家を一軒建てる。その中には使用人や家具がそろっている。それを死者である某家の祖の亡魂に引き渡す。死者はそれを受け取って住み管理する。よその鬼が当該の家屋を奪い取ったり、さえぎったりすることは許さない。仮に奪い取ったり、さえぎるような事が発生した場合は、武夷王は頼まなくとも自発的に抑える。これについて買い主（陽間の某）は心配無用である。以上について売人（武夷王）と買人（陽間の某）とも異存がなく、後悔もしない。だが、口だけの約束で証拠がないため、今、証拠があるのが望ましい。そこで、この家屋一括売買の契約書を証文とし、死者に渡すこととする。同日中に契約人（武夷王）は、仲介人（土地公）と一緒に契約書と銀金額を受け取った。

(4) 銀紙

黄色の方形の紙の上に、銀箔が貼ってある。これはいろいろな儀式の間に少しずつ焼いていく。特に多く焼いたのは、7月31日に法師が「普施」（集まってきた鬼たちに供え物を送る儀式）を行って、その後で、二つのドラムかんと三つの焼紙銭用の鉄かんにいっぱい銀紙を焼いた。この時には金紙は含まれない。法師によれば、ちょうど旧暦7月の鬼月になった時なので、一般の場合よりもずっと多く銀紙を焼いて鬼に送る必要があった。

8月1日の納棺の時に、銀紙を棺の中に敷く。また、棺の蓋を閉じる前に家族一人ずつ二、三枚の銀紙を棺の中に入れてあげる。

(5) 庫銭

形状は黄紙の束を白紙で包んであり、その包みをいくつか、また赤い糸でとじてある。7月31日、火葬の前日の夕方に焼いた。

42000元を出して、陰間の価値では総額6億円分の庫銭を燃やした。内訳は息子（4人）7500万×4＝3億、嫁（4人）4000万×4＝1.6億、娘（3人）3000万×3＝0.9億、長孫（1人）0.5億。これは法師が焼く時に一つ一つ額を読み上げた。

庫銭は近所の空地にトラックで直接運ばれた。祖母の衣服や霊厝と一緒に燃やされた。燃やす時に長男が幢幡を持って、家族が白い線を持ってまわりを囲む。「お母さん、早く庫銭をもらいにきて、早く霊厝をもらいにきて」と家族全員が大きい声で繰り返して叫んだ。点火したのは長孫である。焼き終わろうとする時に、次男は薬罐の水を注ぎながら、まだ燃え残っている庫銭のまわりを三周まわり、家族もその後ろについて家に帰る。薬罐の水は少しずつ撒いて行き、最後に家の水道の蛇口に接するように注意した。

(6) 蓮花金

7月31日に庫銭を焼く時、積み上げた庫銭の上には蓮花金を108個飾った。蓮花金は「往生銭」（写真8。黄色紙。25×25cmの正方形である。赤い字で「往生神呪」が円形に書かれている。その神呪の全体が銭の形をしている。一番外側に「極楽世界」の四文字が見える）を蓮の花の形に折ったものである。少し遠い親戚の方が折ってくれた。

8月1日、火葬場についてから、焼く前に霊柩の上に16個の蓮花金が置かれる。霊柩が焼かれ

る直前に、家族たちは、蓮花金の置かれた靈柩に向かって「火が来るから、お母さん、早めに蓮花金に乗って逃げよう」と高い声で叫んだ。蓮花金は死者の魂が火から逃げる時に乗り物になっているのである。

(7) 買路銭

8月1日、出棺の時に行列の先頭の長女の夫は「放路紙」をする。これは銀紙をまくのだが、道路通行料を意味する。

事例② 功德儀礼

日時 1997年3月18日

場所 高雄県路竹郷竹瀝村、黄府謝老太夫人（享年75才）

做功德儀式、道士4人、道長1人。儀礼用の道壇は喪宅の横の空地に設けられる。

喪宅の入口の両側に二つの紙製の麻燈が飾られる（写真21）。その上に大きな「黄」という文字が書かれる。正廳の外側に靈卓を置く。大きな竹樽の中に金・銀紙を折って、筒状の形にしたものが一杯置いてある。靈卓の上に魂身^(註2)、金童玉女、使用人と一本のこうもり傘を置いて、亡者を祀る（写真22）。靈卓の両側に紙でできた金山銀山、子孫橋、孝女亭、孝子亭、媳婦亭、小衣服、死者が生前にきた衣服と親戚友人の名が書いた供え物などが並んでいる。正廳内の机には死者の位牌（神主牌）と写真がある。その右側には棺を安置し、その上に10個の蓮花金が置かれる。左側には紙製の血盆城（打城儀式用）、七星橋、洗面器と紙銭を焼くための金鼎が置いてある。

儀式の準備は午前8時頃から始まる。8:40《引魂、奏楽、起鼓》、9:00～9:45《発表、啓白》の節目を行う。次の節目の合間に、死者の娘、嫁（女性たち）が棺を安置する正廳で紙銭（金・銀紙を折って、筒状の形にしたもの）を焼く（写真23、24）。このような室内における焼紙銭の仕事は日常的なので女性に任せるといふ。その後、家族（男女一緒）が室外で寿金を焼く。

10:20《開通冥路真科》を行う。七つの燈（七魄）で魂身を開光する（道士が銀紙をラッパの形に折り、火につけ、魂身の前に、太陽に向かって『開光』という文字を三回書く）。この節目が終って再び正廳内で紙銭を焼き、お香を上げる。

11:00～12:00、『大上慈悲滅罪宝懺：上』を誦える。途中、道壇から靈卓の前に移り、家族の名前を読み上げる。その後再び道壇に戻り、家族たちが身に付ける貴重な飾り物や腕時計などをお盆の中に出し、道壇の卓に置いて、捧げる。引き続き、靈卓の前へ移り、午糒を供え、貴重品を捧げ、紙銭を焼く。

午後2:00、『大上慈悲滅罪宝懺：中』を誦える。道士は紙製の花盆を振りながら、お経を読む。この花盆は三角形の筒になっていて、表面に赤い切り紙細工の花盆が貼ってある。高さは30cmである。靈卓の上に紙の花植木が置かれ、その前でお経を誦える。このお経は女の孫とその夫が費用を出し、参拝をする。休憩の時間に遺族（死者の夫を含む）が室外の日陰がある所で話合いながら、紙銭を折る（写真25、26）。

3:00, 魂身を道壇の所に連れていく。長男が幢幡をもって、その後ろに娘がこうもり傘を差し、魂身を持つ(写真27)。『薬懺』を誦える。娘や嫁たちが薬罐と碗を持って、魂身に薬を捧げる。その後、《放赦儀式(龍鳳赦)》を行う(註3)。放赦の赦官(写真28)と馬は紙で作られていて、道士が手で持って演技する。この時、魂身を正廳の前に移動して、家族と一緒に放赦の儀式を見学させる。

4:45～《解結儀式》。魂身を道壇に持ってきて、牒文を魂身が座る椅子の後ろに入れる。なお、この時の牒文については、あの世で庫銭を受け取る時に使うものであり、重要なので以下に説明を加えるつもりである。魂身を置いた机の下に洗面器に水を入れ、洗面器の上に三本の線香が横倒される形で置かれる。九金を焼く。

6:40～8:00, 《打城儀式》。城は女性の場合は赤い色の紙で作られる(血盆城)。高さ約1mで、一辺が約40cmの方形の筒になっている。筒の中の上には中央に死者の紙製の人形がある。人形の高さは約20cmである。その他に周囲に観音、玉女、牛頭馬面などもある。道士と童乱が城を破り亡者を救い出す(写真29)。道士は金古紙を挟んだ三叉の杖を持つ。城を破る前に道士と地獄の小鬼が会話する場面がある。道士に銭をねだる鬼の台詞では、次のように言う。「有理無銭不要到這裏來」(理があってもお金がないなら、ここに來るな)、また「無銭不要想過關」(お金がないのに地獄のこの関所を通れると思うなよ)、更に「不要經衣紙錢, 要陽間銅錢」(われわれ鬼たちは紙でできた衣服や銭はいらないよ、ほしいのは陽間の銅錢だぞ)。その後、孝男が亡者の魂身を背負い正廳に入る。遺族も正廳に入る。そこで入口を閉め、閉め切った正廳内で救い出した人形や小衣服を焼く。疏文と九金も焼く。その疏文は救苦天尊に送る。

8:00～9:00, 『慈悲水懺』を読む。これは娘とその夫が費用を出し、参拝する。

9:00～近所の空地で、焼庫銭の《填庫》を行う。庫銭は前もって人に頼んで円形に積み上げている。側に机を出して、庫官とその夫人、庫銭を運ぶ役夫四人の人形を置く(写真30)。その前に簡単な三牲とお酒三杯を供える。道士がお経を読んでから、庫銭に火をつけ、靈厝と死者の生前の衣服などを一緒に焼く(写真31)。家族は白い線を持って庫銭の回りをぐるりと取り囲む。この時に童乱がくる。見学したのはここまでである。

次に靈厝について補足説明したい。この家で準備した紙厝は三階建ての洋式の家であった(写真32)。その表札に書かれた住所は「鄭都市安祥大道222号」であった。この靈厝を焼く前に靈厝のまわりにたくさんの紙銭をぶら下げたり、筒状の紙銭を靈厝の前庭に投げ入れた(写真33, 34)。このことについては「金銀吊厝角, 田園年年買」(金紙銀紙を家の角にぶら下げれば、毎年たんぼを買い増やすことができる)という意味が込められているという。

なお、庫銭についてはこの儀礼を担当した杜永昌氏から次のような説明があった。

その1

今回の功德ではあの世の価値で三億五千万貫の庫銭を焼いた。その内の九万貫は亥年生まれの人を受生銭の定額を返却するためのものである。死者本人すなわち黃謝氏錦合娘の庫銭は天曹内院第四庫院大夫のもとに送られる。この理由は死者が生まれた時に、あの世の特定な金庫から一

定の額の受生銭を借りてきたので、その借金を返すのである。台湾では諺として次の言い方がある。「帶多少來，帶多少回去」（生まれた時にいくら借りてきたから、死んだ時にはいくら持って帰る）。なお、この死者は亥年生まれなので、庫銭の管理は第四庫の阮大夫が行うのである。

冥界の十二庫院は次の通りである。第一院：申，杜大夫。第二院：子，李大夫。第三院：辰，袁大夫。第四院：亥，阮大夫。第五院：卯，柳大夫。第六院：未，朱大夫。第七院：寅，雷大夫。第八院：午，許大夫。第九院：戌，成大夫。第十院：巳，紀大夫。第十一院：酉，曲大夫。第十二院：丑，田大夫^(註4)。

その2

庫銭は直接に庫院府（銀行）に送金するものなので、手数料を必要とする。死者があのお世で実際に受領できる額は三億五千万貫の十分の一の手数を控除された残額である。すなわち、三億一千五百万貫である。

その3

庫銭を受領する時に合同の制度がある。書類の一部を死者に渡し、一部を庫院に渡しておき、死者が受領する時は、二つの書類を照合して、三宝印の割り印がぴったりと合わなければならない。

その4

六等親以内の親戚は自分の家の功德でなくても、親戚の功德の機会を利用して、親しい死者に寄庫することができる。大抵の場合は夢に死者が出てきて、お金がほしいと要求するので、親戚の功德の時に送金することになる。

その5

百日忌，対年忌（小周祥忌），三年大周祥忌の時にも填庫することができる。

その6

儀式の所々で少額の九金九銀を焼くことがあるが、それは庫銭と異なり、金額の数字を記録することはない。それらは死者のお小遣いのために送るからである。庫銭の場合は必ず金額の数字に注意する。

次に上記その3で述べられた合同の制度に関して、高雄県で使用される牒文を入手したので以下に大意を訳して、紹介したい。牒文の資料は杜永昌氏の提供によるものである。

功德の「解結科儀」の時，魂身に渡される牒文は次のようである。

(原文)

三寶拔亡道場

今據

中華民國臺灣省

號 居住，奉道追修禮懺，拔度填庫，陽世報恩

暨孝眷人等，具陳哀旨，痛念

亡過 一位正魂，原命生於 年 月 日 時，受生拜借
天曹内院第 庫 大夫案下，冥財 萬貫文，托生中土，未遑填納，不期卒于
年 月 日 時別世，切慮，魂歸陰府，魄入南柯，不逢薦拔之功
難脱沈淪之苦，消取今月吉日仗命黃冠，抵就哀居，追資功德，代納庫錢，除已具奏
天曹，證盟修奉， 仰冀
恩光，俯垂超度外，仍録合同牒文二道，一道上
天曹内院第 庫 大夫案驗，一道亡靈収執照會者，
右牒，給付亡過 一位正魂，収執為照， 伏以，夙債完納，立
天曹原目，用伸於冥府，既交銷於簿籍，乞昇度於人天，對
聖宣揚，執此為據，故判，内共庫錢 担， 萬貫。

(訳文)

三寶拔亡道場。今、中華民國臺灣省（住所）に居住し、道教を信奉し、死者のために追善供養を行い、礼懺して亡魂を抜度し、受生時の借金を天庫に填し、この世にあって、死者の恩に報いるべき、孝男（氏名）および家族の人々がいる。彼らが詳しく哀しみの趣旨を述べたことによつて、この儀式を行う。

孝男たちは、次のことを大変心配している。亡くなった顯妣である某（氏名）の一位の正魂は、そのもともとの生命は、某年月日時に生まれたものである。生を受けるに当たつて、天曹内院第某庫の某大夫の案のもとから、冥財幾万貫文を拝借して、中土に転生して来たのである。しかし、まだ急いで借りた財を填納するに及んでいないうちに、思いがけなく某年月日時にこの世を去つて亡くなってしまった。

まことに恐れることは、死者の魂は陰府に帰し、魄は南柯（冥界）に入つてしまつて、もし魂を薦拔する功德を行わなければ、死者は地獄に沈み落ちる苦しみから脱れられないだろうということである。そこで、今月の吉日を選んで、道士たちに頼んで、自宅において、追善供養の功德によつて、死者に代わつて孝男たちが庫錢を代納することにした。

先上天曹に文書を送つて、道教の功德を行う時には、約盟の通りにして下さるよう頼んである。神々には、恩光を照らして下さるよう、下界を見て、亡者を超度して下さるよう、心から御願ひする。以上の他に、合同（割り符）の牒文を二通作成した。一通は、天曹内院第某庫の某大夫の案のもとに送つて、証拠とする。もう一通は、亡靈が身につけて証拠とする。

この牒は、亡くなった顯妣某（氏名）一位の正魂に給付して身につけさせて証拠とするものである。考えてみるに、うまれた時の債務は完納されて、天曹の欠債の数字は満たされた。従つてこの事を冥府の方にも連絡してあり、すでに死者の名前を帳簿から消去し終わつてゐるはずである。そこで、死者が再び人界または天界に昇度することを希望する。聖なる神々に対して、この事を宣揚するために、この牒文をもつて、証拠とする。よつて合同文書の一方とする。全部で庫錢は幾担幾万貫である。

「填庫科儀」において庫官に送られる牒文の例は、一部分のみ魂身の持つ牒と異なる。異なるのは、以下の部分である。

(原文)

牒具受生冥財 萬貫文，賠貼在外，現到
貴庫交納，伏祈指揮掌財部屬夫脚等衆，交割資財，搬運入庫，點對姓名，勾銷簿籍，干冒神威，伏俟昭報。

(訳文)

この牒文には、受生冥財某万貫文を添付してある。但し、賠貼（消耗費など控除分）は除外する。現に貴庫に到って交納するに当たっては、庫官には次のことを御願いたい。掌財の部属の人夫、運搬掛りの者などを指揮して、資財を交割して、運搬して天庫に納入し、姓名を確かめてから、借金の帳籍からこの死者の名前を消去することを。神威を冒かすことを恐れるが、伏してここに靈験を待ちたいと思う。

以上の牒文の内容から見ると、功德の填庫においては、受生の時の借金を返還することが主な目的であることがはっきりすると思う。但し、これは道士の専門知識に属することであり、一般の人々は、もっと漠然と、死者にお金を送ることで、恩返しをし、死者の冥界でのよい暮らしを祈っているだけであると思われる。この点については、後に第四章第二節で更に考えたい。

事例③ 功德儀礼（中国大陸の事例）

1997年10月に上海で道教式の功德儀礼を見る機会があったので、次に紹介しよう。

日時 1997年10月8日

場所 上海市南市区白雲觀

依頼人 畢濟良氏（香港某集团有限公司代表取締役）

功德儀式の榜文は以下の通りである。

(原文)

道 祖 遺 風

中華人民共和國原籍香港千德道五十八號A第一座二十七樓A单元今在

上海市南市区白雲觀建壇所奉

道修齋，超度，宣經，禮懺，破獄，往生，祈度，陽上奉祀 孫 畢濟良，

孫媳 董滿英，曾孫 畢鶴騰，龍騰，

統陽眷等

投誠就為

先祖父畢冠石公享年七十七歲元命乙巳十月十七日辰時受生，歿於

公元一九八一年農曆十月初六日午時壽終，去世以來，陽上超度修薦，一誠

承伸，並度九祖母林伯英夫人，温瓊夫人，同叩
慈仁，普登仙品，仗玄看誦
玉皇心印妙經，度亡五品真經，青元睿號，往生神咒，拜禮
玉皇宥罪大懺，淨壇請將，結界五方，進呈
青元破獄表文一函，策破

地獄，血湖神燈，度上仙橋，引魂沐浴，上朝
三尊十殿，下濟六道四生，咒施

法食，焚化冥資，給付文憑，送登仙界，伏願
上帝好生，開宥六根之三業，
至尊錫命，引登八極以九霄，

謹於今月初七，仗道建壇，一永日於中延奉
天真，福被冥陽事，本壇得此來詞，除已依
式修奉外，須至榜者，今將道職登列於後

高功法師 朱鼎馨

都講法師 史大碧 黃冠全堂

監齋法師 瞿大樺

右諭通知

天運丁丑年九月初七
榜

この榜文を全訳することは省略したい。ただし，その中に「焚化冥資」とある点にはまず注目したい。この儀式は血湖から亡魂を救う内容を含む。

血湖というのは，道教では冥府に〈血湖〉と呼ばれる地獄があり，難産のために死んだ母体や胎児の魂は，ここに落ちるといわれている。そのため，難産のために落命した母子があると，道士は壇を設けて〈血湖醮〉と呼ばれる供養を行う（高橋 1994：123）。

実際に儀式の中では依頼者が紙船を引っ張って，血湖地獄に苦しむ祖母の靈魂を救出し，天兵の応援を得て地獄を破り，連れてきた亡魂を贖罪し，鍛え直し，金銀橋を渡って天界に昇らせる場面があった。更に，天界で使う冥銭の受取証を焼いて送ることも行われた。この事例を台湾の場合と比較して見ると，填庫の科目が台湾のように独立した節目となっていないことが注目ができる。また冥資の形も赤い袋に銀元宝の形の紙銭を入れたものである。その赤い袋には「給付先祖父 畢冠石公，先祖母 林伯英，温瓊夫人収執，陽上 孫 畢濟良敬具」と記されている。台湾南部でこのように紙銭を赤い袋に入れるのは見たことがないので，習慣の違いを感じた。数量的にもずっと台湾より少なかった。

上海の血湖齋で使用した紙製の船は儀式が終わっても焼かれなかった。紙製の神像も含めて，上海では何度も繰り返して使うようである。詳しく尋ねなかったが，紙製品の製造と供給の仕組

み及び環境保全の考え方などが、台湾とは異なるからだと思う。

註：

- (1) 大淵氏によれば、武夷山は福建省境の名山武夷山の神ともされる。史記封禪書に武威君としてその名が見え、後漢以後は鎮墓券に武夷王として屢現れ、死者に関わる神格とされていた（大淵 1983：677）。
- (2) 魂身については、丸山氏によれば、次の説明がある。「この救済される霊的存在は、儀礼の中では紙とプラスチック製の魂身という人形に付着していると考えられており、一連の道教儀礼はすべてこの魂身が参加するか、魂身へ向けられたものである。魂身は、儀礼の終わりに、輿に乗せられて焼かれて、この世からさって、あの世では思いつく限りの文明の利器の具備された住家もらい、子孫から送金を受けて暮らす」（丸山 1996）。
- (3) 做功德と放赦については浅野氏の意見が参考になる。「做功德は、死者の救済を目的として、主にその死者の子孫が行う儀式である。子孫にあたる人々が、道士や僧侶を招き、道教的ないし仏教式の儀礼で神や仏に祈り、その功德によって生前の罪を償い死者を救おうとするものである。做功德の節目には、放赦や打城など、かなり具体的な形で死者の地獄からの救出を表したのも含まれている。放赦というのは地獄に堕ちている亡者に赦書を出す儀式であり、紙と竹で作られた赦官や赦馬が登場（道士が片手に持って用いる）。打城は、地獄の城を破って中から亡者を救い出すという芝居仕立ての節目であり、実際に道士や僧侶が紙と竹で作られた地獄を破って亡者の魂身（人形）を救い出す」（浅野 1991）。
- (4) 生まれた年とその所属の庫官及び返却すべき金額の関係については、幾つかの説があって必ずしも一致していない。例えば、『靈宝天尊註禄庫受生経』、『太上老君説五斗金章受生経』などを参照（大淵 1986：547）。

なお、大淵氏の説によれば、填庫は次のようなことである。

填庫とは前世で受けた亡者の借金（受生銭）を遺族達が返済するために天界の庫へ納付するというのが主意の如くで、餘分が生ずれば亡者個人のものとなるという。亡者の世界でもお金の入用な事は様々あるのである。填庫するについては、庫銭を納めるべき天上の庫及び庫官、庫銭の規定額が亡者ではなく、功德をする当人の本命（生まれた歳の十二支）によって決まっているとされる（大淵 1986：546）。この大淵説に対しては浅野氏による別の見解がある（浅野 1991：253：註17）。私の調査では本章第一節事例②のその1に述べたようであり、大淵説ともやや異なる。

金額の決め方について、上記とは別に次のような民間の説もある。葬儀屋の莊明氏の話によると、庫銭の額は縁起のよい数字を選ぶ。台湾語の「3」、「6」の発音は「掴む」、「握る」の掛け詞に似ているため、喪家の経済状況によって3億や6億を納めることに決まると言う。

第二節 廟の小法事と饗祭

小法事の事例でも盛んに紙銭を焼くことが行われる。また特殊な目的の紙製品も存在する。以下に台南市のいくつかの廟で小規模な法事に使われる紙銭と紙製品に関して記述しよう。なお、本節の記述は、各儀式の詳しい紹介が目的ではなくて、紙銭と紙製品について簡単に述べるだけである。

(1) 東嶽殿の法事

東嶽殿は地獄を管理する東嶽大帝を祀っている廟である(写真35)。この廟では死者の霊が冥界で苦しんで、在世の家族の夢に現れ、その苦しみを述べるので、家族が死者を守るために神に対して紙銭を送ることが行われる。

ここでよく焼かれる紙銭の種類には、特に地府の神々に送るための天庫銭、地庫銭、寿金、九金、経衣などがある。東嶽殿事務員の王さん(58才)によると、東嶽殿で使う天庫銭は人(仁)聖大帝に、地庫銭は地藏王、閻羅天子、酆都大帝に、寿金は一般の神に送るという(写真36)東嶽殿の焼紙銭の分量は特に大量なので、その金爐には、環境保全のための装置が付けられている程である(写真35)。

第二章洪銘宏氏も述べているように、死者の霊に問題がある時は、この廟で小型の紙曆、紙銭を焼いて死者に送ればよいという説もある。

東嶽殿で使用される疏文の内容について次に紹介しよう。疏文には、①和解(陰界と陽界の間に紛糾があつて、それを和解する)、②領令(地獄の旨令や兵馬を出動させて陰事を処理する)、③歸神(祖先の亡魂に家に帰って神になってもらう)、④補運(運を改める)、⑤保亡(祖先を超度する)、⑥一般の小法事用などいろいろな種類があるが、ここでは、一般の法事用の疏文を示すことにする。

(原文)

台南東嶽殿疏状

神光廣大 聖德無疆 誠心祈禱 叩求庇佑 今寓

中華民國台湾省

居住恭就

祈禳消災解厄保安植福信士(女) 年 月 日 時生

偕合家人等祈求

地府尊神主照，言念茲因信士(女)

自流庚以來，歲君月令不順，無方可求，

奉請作主，降壇指示，因

涓今吉日虔具疏文一道，敬備壽金 _____ 支，天(地)庫錢 _____ 萬。恭對

案前，投疏，消災，解厄，押退凶星，雜 _____，陰邪，歸位，庇佑陽世信士(女)合家大小 _____，逢凶化吉，星辰明顯，元神自在，添福添壽，添根基添財利，命運亨通，關隘消除，劫 _____ 數解除，災禍永不起，凡在光中全叨巨庇，合家老幼平安，謹呈疏文百拜叩謝恭望

聖慈俯垂採納文疏

中華民國歲次 年 月 吉日疏上奉

(訳文)

神光は広大にして、聖徳は無疆である。誠心もて祈祷し、叩して庇佑を求む。

今、中華民國台湾省(住所)に寓して居住し、うやうやしく某(法師)に依頼して、祈禳し、災を消し、厄を解き、安きを保ち、福を植えようとしている信士(女)(氏名)がいる。この者は某年月日時の生まれである。(氏名)などの一家全員の人たちとともに、地府の尊(東嶽大帝)に守護されることを祈求している。

ここにおいて考えるに、次のような原因があることを申し述べている。信士(女)(氏名)は、近頃より年や月の時間の巡り合わせが不順で、救いを求めるすべがない。そこで神に主人となってもらい、壇に降下してもらい、指示を受けることにした。それによると、不幸の原因は次のようである。(原因を記入する)。

そこで、占いをして、本日吉日を選んで、うやうやしく疏文一通を準備し、また寿金幾支、天庫銭と地庫銭を幾萬そろえた。うやうやしく神の案の前に対面して、疏文を奉る。

どうか、災を消し、厄を解いて下さい。どうか、凶星、雜（？）、陰邪を退治して、もとの所へ帰らせて下さい。陽世の信士(女)の家族全員老若すべてを保って下さい。凶に出会っても吉に変わるようにして下さい。

運命を司る星は輝き、元神は自在でありますように。福と寿が増えますように。根基と財利がしっかりし、増えますように。運が開けて、困難が消えますように。劫数が解けて、災禍が永遠に起こりませんように。凡そ、光の中ではまったく神の大きな守護にたよっています。家族全員が老いも幼きも無事でありますように。

謹んで疏文を呈して百回拜します。叩して感謝します。謹んで神の慈しみがあることを希望します。下界の方をご覧下さって、この疏文の意を汲み取って下さい。

以上長く引用したが、下線部分の所に、寿金、天庫銭、地庫銭をいくら神々に送るかを明記し、あることに注意したい。東嶽殿の大量の紙銭はこうした内容の疏文とともに焼かれているのである。

(2) 臨水夫人廟の法事

臨水夫人廟の小法事に使われる紙製品について、先学の文章があるので、以下に引用したい。

台南臨水夫人、治病・辟邪・護産・保童など、あらゆる魔除けに靈験をあらわす女神。特に難産を助ける神とされる(田中 1994:606)。「不孝有三、無後為大」という觀念が強いため、結婚してから生育を司する廟へ子供ができるように註生娘娘(子授け、安産、幼児保護の女神)

(鄭 1994:394) を折る。

人間がこの世に生まれてくることは、あの世から送られてくるという民俗的観念がある。あの世の天上界には花園があり、花園の管理員は「花公花婆」である。人が生まれるということは、この花園で花が咲くからである。白い花ならば、生まれてくるのは男の子であり、赤い花ならば女の子である。

「花」は胎児を意味する。男の胎児は「白花」、女の胎児は「紅花」と譬え、「有花」は妊娠するという。「紅花」を「白花」に換えることは「換花」或いは「換斗」という(洪 1987:1~5)。

1997年3月に臨水夫人廟で「栽花換斗」の儀式を見た。大体以下のように観察した。依頼人は台中に住む30代の女性である。彼女と一緒に来た友達の話によると、彼女は二人の娘を産んだが、男の子がほしいので、わざわざ台中から来たという。儀式では儀卓の上に、紙で作られた「花公花婆」や赤と白の紙製の造花が盆の中に飾られる。花に水をかけるための桶、杓、青い色の四本足の天狗像が置かれる。紅頭法師が一連のお経を読んだり、女性に指示を与えたりした。お経の後で占いをした。占いによって次のことが分かった。この女性は男の子を一人ではなくて、二人生む必要がある。なぜなら、この女性の弟は子供がいなくて死んだので、女性はその弟の分を余計にもう一人生まないといけない。もし一人しか生まないと、弟が恨んで、その子がうまく育たないだろうというのである。更に紅頭法師が次のような台詞を話した。いろいろな種類の悪い子はいません、いい子が生まれますように、もし男の子供がほしいなら、この花を髪に挿して夜ベッドまで持って行って下さい、とかである。この儀式全体が終わった後、紙銭を燃したはずであるが、詳しい観察はできなかった。

(3) 天公廟の法事

台南市天公廟(天壇)で見た祭星儀式(天狗白虎が人を犯したので改運する)では、糊紙製の太歳(一人、黄冠の髭がある人物)、五鬼(五人、青、赤、白、紫、黄の凶悪な顔した鬼)、白虎(一匹、白い虎)、天狗(一匹、紫の犬)、生豚肉、補運金(天公金、寿金、天庫銭、地庫銭、買命銭などを組合せてある(写真37)。なお、買命銭は粗紙を円筒にしてあり、その外に白紙がある。白紙に穴開きの貨幣の形が多く赤で印刷されている。

(4) 七娘媽廟(正式な名称は開隆宮である)の法事

台南市七娘媽廟で見た新婚の婦人が法師に伴い、寿生銭で作る36個蓮花座(1個の蓮花座では下の座は24枚、上の部分は12枚の寿生銭で作りあげるもの)を七娘媽に捧げ、「会縁」(七娘媽に結婚したことを報告する)する。

この廟の紙製品で、最も特別なものは七娘媽亭である(写真38)。1996年7月にこの廟を訪問して、廟の管理員に尋ねた。旧暦の7月7日に16才の子のある家では、その子の成人式をお祝いするために、必ず紙製の七娘媽亭一座を購入し、様々な供え物と鳥母衣7個、福金7束、九金7束、経衣などを七娘媽廟に持ってきて祭ってから焼く。

管理員の鄭天保さん（故人）の話によると、必ずしも旧暦の7月7日や16才のその年で成人式を行うこととは限らない。ある30代後半の男性は仕事が順調ではなかった。占いによって次のことが分かった。子供の頃に体が弱かったため、七娘媽の義子になったが、16才（七娘媽の保護を要しない年齢に達した年）になっても成人式を行わなかった。すなわち、七娘媽の保護に対して、謝恩してなかったことが仕事不順の原因であると分かった。それで、成人式をやり直して行ったという。この時にも七娘媽亭と紙銭を同じように焼いた。

（5）開基玉皇廟の法事

この廟の改運法事では、十二元神（十二生肖の神）を使う。頭の部分は紙の顔であるが、体の部分は藁で作る。また7枚の虎爺銭を焼く。紙製の「関」も使用されるという。これらについて詳しいことは不明なので、将来の調査に期待したい。

（6）醮祭において使用される紙製品

次に台湾の醮祭を取り上げるが、実際に調査したことはないので、古家・松本氏と浅野氏の論文を引用したい。

古家・松本氏の論文（1991）では、王爺醮祭に使われる紙銭は次のように記されている。「王爺神像が人々に担がれて河原へ向かって動き出し、紙銭を撒きながら進行した。拾った紙銭はお守りにする。……王爺船が河原に到着すると、トラック二台分の紙銭や払いに使った人形、箒、紙の首かせなどが王爺船の回りに積み上げられた」。

浅野氏の論文（1995）では、台湾の祈安醮祭儀礼では醮壇内、様々な供え物とともに多量の紙銭類（篙銭、寿金、銀紙、五色篙銭、大極、天金、財子寿金、尺金、天銭、天庫など）、糊紙製品（表馬、文字架、平安車、五鬼、六獸、后土軸、宅虎、廟龍、表盤、水燈厝、六騎、表官、表亭、表盤、十方肅静旗、命魔盪穢旗など）も各卓に供えられると述べられている。

第三節 年中行事と人生儀礼

（1）年中行事

年中行事に使用される紙製品について、台湾では神仏の誕生祭や寺廟に関する行事も含めれば、殆ど毎日紙製品を使うというのも過言ではないほど行事が多い。ここで取り上げる紙製品の種類は、原則として主に一般の家庭の年中行事において使用されるものである。

月	日	行事名	主な内容	祭祀場所	紙製品の種類
1	1	春節	正月を迎える	家庭、寺廟	廟：甲馬、戦士・馬、花灯。 家庭：寿金、銀紙。
	4	送天神	天神を送る	家庭、寺廟	廟：甲馬。 家庭：寿金、雲馬、總馬。

	5	迎神	留守番中の神 を迎い	家庭, 寺廟	廟：甲馬。 家庭：寿金, 雲馬, 總馬。
	9	天公生	玉皇大帝誕生祭	家庭, 天公廟	天公座, 天公金, 寿金, 天金, 尺金, 大九金, 天銭天庫, 中極金 (三官大帝), 財子寿金 (南北斗君), 補運金。
	15	元宵節 (三界公生)	燈節, 三官大帝 誕生祭	家庭, 寺廟	花灯, 中極金。
2	2	土地公生 (頭牙)	福德正神誕生祭	家庭, 寺廟 商店, 会社, 工場	廟：各神像。 福金, 寿金, 金銀紙, 経衣。
	19	観音媽生	観音仏祖誕生祭	寺廟	各神像, 寿金。
3	3	清明節	墓参り	家庭, 墓地	金白銭, 墓紙, 金銀紙。
	23	媽祖生	天上聖母誕生祭	媽祖廟	各神像, 寿金。
5	5	端午節	竜舟祭, 祖先祭祀	家庭	金銀紙。
7	7	七夕	七娘媽誕生祭	七娘媽廟	七娘媽亭。 主神に寿金, 部下に九金, 福金, 床母衣。
	15	中元節	盂蘭盆会	家庭, 寺廟 商店, 会社, 工場	廟：普渡公, 普渡山, 寒林院, 同歸所, 沐浴亭。 地藏王菩薩, 十二殿閻羅王に 寿金, 金銀紙。 祖先や孤魂野鬼に銀紙, 経衣。
8	15	中秋節	月神誕生祭	寺廟	寿金。
11		冬至節	団子を作る 祖先祭祀	家庭	寿金, 金銀紙。
12	16	尾牙	土地公を祭る	家庭, 商店 会社, 工場	寿金, 金銀紙。
	24	送神	家神, 竈神, 王爺を送る	家庭, 寺廟	廟：五宮馬, 五支娘傘, 五頂神轎で王爺を送る。 家庭：寿金, 雲馬, 總馬。
	25	接天神	天神を迎う	家庭, 寺廟	寿金, 雲馬, 總馬。
	30	除夕	祖先祭祀	家庭	金銀紙。

この表は台南市の洪銘宏氏の話に基づき、渡辺欣雄（1991：39）、植松明石（1991：516～520）などをも参照して作成した。

春節やその他の行事で、甲馬、雲馬、総馬などを焼くのは、神に捧げて、その馬に乗ってもらうためである^(註1)。台南の甲馬の紙には黄紙の上に鎧、冑と矛、そして馬が一匹黒で印刷されている。

元宵節の時に拜する三官は道教の神である。天官、地官、水官をさす。天官は人に福を授け、地官は罪を赦し、水官は厄を払うとされる（野口 1994：202）。

土地公生や中元節では金紙の他にも銀紙を焼く。銀紙、経衣は祖先や鬼を祭る時に使う紙銭である。銀紙は冥界で使用する銀銭を象徴するが（写真40）、経衣の上には様々な衣服や日用品の模様が印刷されている（写真41）。

年中行事で最も多く紙銭を焼くのは、清明節と中元節の二つの行事の時である。これ以外の時は、焼く分量はずっと少ない。楊玉君氏によれば、台湾の清明節では墓参りの方式は「掛紙」と「培墓」に分けられる。「掛紙」はまた「壓紙」とも言い、祖先の家を直すことを意味をする。使われる「墓紙」は長方形で、黄、白、五色など三種類がある。二、三枚一組で小石を使って、雑草を刈ったあと墓頭、墓碑及び墓の側にある土地神の上に置く。簡単な供え物を並べ、紙銭を焼くと、「掛紙」の儀式が完了する。「培墓」は「掛紙」より賑やかな儀式である。「培墓」の時に三牲（土地神を祭る用）、五牲、菜碗（墓を祭る用）などを墓の前に並べて祭る。その後、家鴨の卵の殻を墓の上に置き、紙銭を焼いて爆竹を鳴らし、完了する（楊 1995：57）。

台南地区の「墓紙」は、掃墓の時に、墓碑の上に置く。その意味は祖先のために住居の屋根を修理してあげることである。置く時に切り込みのない方を上にして、切り込みを入れた方を下にする。屋根の瓦の下の方を形象し、雨水が屋根から下に流れ易いようにするという。また「金古紙」を墓地の頭の部分と周囲に置く。これは石で動かないように押さえる。これは動物（墓を荒らしに来る動物、骨を取りに来る動物）に与えて追い散らすためである。

（2）人生儀礼

人生儀礼に使用される紙製品について、以下の表は台南の人々の場合を取り上げる。

時と場所	種類
出生～満月，ABC	床母衣，金仔。
周年，ABC	床母衣，金仔。
成人式（倣十六歳），B	床母衣，金仔，寿金，七娘媽亭。
結婚，ABCD （拜天公）	大太極，中極，天庫天錢，地庫地錢，寿金，中極財子寿金 天尺金，篙錢，補運錢，九金，花脚庫花脚錢，鳥母衣。
求子，BC	花公花婆錢，床母衣，金仔，寿金。
妊娠（註生娘娘），BC	花公花婆錢，床母衣，金仔，寿金。

祈安・補運・解厄, DE	改年経, 改運紙人, 改運生肖, 本命銭, 陰陽銭, 三官大帝銭, 亡魂銭, 七星銭, 刑尅銭, 車厄銭。
葬式, A	足百金銀紙で元宝を作る, 錫紙の元宝, 庫銭, 銀紙, 往生銭, 蓮花 座, 路關銭, 轉輪銭, 紙曆, 人形(金童玉女, 魂身), 乗り物(紙 轎, 紙馬, 紙車), 幢旛, 麻燈。
忌日, A	金銀紙。

各人生儀礼が行われる場所は次の記号で表中に示す。A, 自宅, B, 七娘媽廟, C, 臨水夫人廟, D, 天公廟または開基玉皇廟, E, 東嶽殿。

本表は, 台南市在住の主婦莊玉燕さん(45才), 紙製品販売業の黃文賢さん(58才)の話に基づき, 劉還月(1994:268~313。)も参照して作成した。

台南の人々にとって, 人生儀礼に使用される紙製品は, いくつかに分類できる。

第一の分類は子供の出生と生育および結婚後の妊娠にかかわる儀礼に使用されるものである。これらはBの七娘媽廟とCの臨水夫人廟で焼かれるもので, 床母衣, 金仔, 花公花婆銭が代表的である(写真9)。なお, 「金仔」は金紙と同じであるが, この場合は, 銭を表すのではなく, 小さな金塊を表し, 金塊を神に送る意味があるという。

第二の分類は, 拜天公で使われるものである。拜天公については, 古家信平氏によれば, 拜天公の時に, 玉皇上帝, 三官大帝, 南北斗星君, 地藏王菩薩, 東嶽天齋仁聖大帝, 地府尊聖, 王母娘娘, 註生娘娘, 十二宮婆姐, 花公花婆に疏文を誦し, 疏文にあったそれぞれの金紙を送り届けるのである。玉皇上帝: 大太極, 中極, 天庫天銭, 寿金, 天尺金, 篙銭。三官大帝: 中極財子寿金, 天尺金, 天庫天銭。南北斗星君: 天庫天銭, 補運銭, 寿金, 天尺金, 九金。地府尊聖: 地庫地銭, 寿金, 九金。東嶽天齋仁聖大帝: 天庫天銭, 寿金, 九金, 天尺金。王母娘娘, 註生娘娘: 花脚庫花脚銭, 寿金, 九金, 鳥母衣(古家 1997)。

なお, 鳥母衣は床母衣と同じであるが, 鳥母は七仙娘娘のことで, 子供の世話をするという伝説に基づいている。

第三の分類は祈安・補運・解厄に使われる紙銭と紙製品である。これらは小法事の際に使われるものと重なるものが多い。

第四の分類は葬式で使われる紙銭と紙製品であり, その使用については本章第一節で述べたところである。

以上を見れば, 人生儀礼でも多くの紙製品が使われていることが分かると思う。

註:

- (1) 「正月四日は『接神』又は『迎神』とて舊臘二十四日即ち『送神』のとき下界の諸神悉く天に昇り, 玉皇上帝に朝賀し, 下界に於ける人間の行為の善悪を報告し終つて再び下界に還賀する日であると云つて居る。之が為め午後四時頃に至れば各戸何れも此の天より降下する諸

神を歓迎する為め、牲體、果物等を供え爆竹を放ち香を焚き、燭を點じ、金紙を焼き礼拝するのである。又「神馬」「甲馬」として武装したる神馬及天兵の繪を印刷した紙を焼く。之は神馬、甲馬等を焼き上天せしめて諸神が下界に還駕する騎馬に供するものであると云う。舊臘二十四日諸神上天して正月四日下界に還駕する迄の間は下界に諸神不在となるが如きも然らず、此の間天神本部に在つては他の天神を下降せしめて下界を巡邏させ、諸神不在中の出来事一切を察知し、天神に報告するのであると云う。此の天神の降臨を迎ふることを『接天神』と云ふ、歸上を送るを『送天神』と云ふ。」(鈴木 1975:279～280)。なお、李昆声氏によれば、中国の白族にも甲馬を燃やす習俗がある。新築や求子の儀式に燃やされるものである。これは主人の願いを速やかに諸神の所へ届けてもらう交通手段である。甲馬はもともと漢民族の習俗であったという(李 1997:274)。

第四章 紙製品使用の背後に見られる觀念

第一節 冥界觀

台湾の祭祀ではなぜ、あのように多くの紙製品が使用されるのであろうか。特に葬送儀礼の場合は、死者の住むあの世、すなわち陰間が、生きている人の住むこの世、すなわち陽間と同じであり、いろいろな生活用品があつても必要であるという考えがあるからであろう。この事について、先学は次のように述べている。

曾景来氏によると、金銀紙が必要なわけは、「人間死後の世界、即ち陰間に於いても其の生活を営む以上、陽間に匹敵する貨幣が必要となる。又かくあつて然るべきであると考へられたに違ひない。……端的に言へば、陽間に經濟生活の單位たる通貨がある以上、陰間にも之がなければならぬ、處こそ変われ、陰間の生活は陽間のそれと同じであるからである」(曾 1995:181～183)。

大淵忍爾氏も、宋代の寄庫制度を道教が冥界に導入したと説明した後に、「死者の世界と現實世界とに區別を設けないのは中国的思考の特色の一つである」(大淵 1986:551)という。

こうした現世と同質の冥界に行つて住むことになる死者の靈魂は、どのような存在なのであろうか。

鈴木清一郎氏によると、「台湾人の死亡に対する觀念は先ず第一に靈魂不滅の觀念である。人は魂と魄との結合であり、之を死亡に依つて魄は土に歸するも、魂は身体を離れ宇宙に彷徨ひ永遠に存在するもので、此の靈魂は一面に於いて其の子孫を保護するのである。それで之を祀つて孝を盡さねばならぬと云うのである」(鈴木 1975:206)という。

このような死者の靈に生者が持つ態度は劉枝萬氏によると、二種に分かれるとされる。「生者が死者に対して抱く態度には結合と分離の両極がある。すなわち死者へのひたむきな倫理的思慕愛惜の情によって關係を維持しようとする態度と、逆に根強い本能的嫌惡恐怖感のために關係斷絶をはかろうとする態度である。……。例えば、故人をしのんで夜通し屍體を見守る守舖、屍體の足もとに盛られる脚尾飯や靈前に膳を供えて亡者を飢えさせざるよう氣を使う孝飯、死靈が

冥土にたどり着くまでの旅費に充てるため屍体の足もとで紙銭を焼く焼脚尾銭、或いは紙銭を焼き冥府の庫吏をして亡者に届けさせる困庫銭など銭財の贈与、臨終に当たって家族に現金を分与する分手尾銭、葬後における一連の行事などは、親近感に発する追慕の心情の一面として前者に属する」(劉 1981:235)という。以上の先学の研究から、台湾では、陰間の生活と陽間の生活とは同じものを必要としていて、不滅の靈魂がそこに住み、家族は、一面では死者を恐れても、一面では、親しむ気持ちが強くなる。紙銭や紙製品は、死者をいたわる気持ちから送られるものであると言える。

先学の説につけ加えたいのは、陰間も陽間と同じであるといっても、必要な品物の現物を送ることはできないということである。死者に現物を送るのは、一般の人にとっては高価すぎるからである。そこで材料としては安くて、しかも加工して、いろいろな物を製作することができる紙を採用したと思う。これによって、陰間で必要なあらゆる生活必要品の模型を美しく作ることができる。そして、紙製品を陰間に送る時は、そのまま埋めるのではなくて、火をつけて燃やして、煙に変える。火による変化、変形が大切になっていることも注意したい。

第二節 金銭観

本節では、死者になぜ大量の紙銭を送るのかについて考えてみたい。

まず、第三章の事例研究、第一節葬送儀礼において、既に紹介した「填庫」の考え方を更に詳しく検討しよう。そしてその後で、それとは少し異なる一般の人々の考え方を論じたい。

(1) 填庫について

今の葬送儀礼において、庫銭を填納する習慣があるが、そのモデルとなる制度は、宋代頃に始まったと考えられている。宋代は、中国史上、貨幣経済がたいへん発展し、手形や有価証券の発達さえ見られたという(伊原 1997:90)。

寄庫というのは、大淵氏によれば、「北宋以来行われた官設の制度である。「寄」は「預ける」と言い、各地方に(寄庫は)おかれて居た。宋代には他に孤児が成長するまで、官がその財産の管理に当たる検校庫なる制度もあった。填庫思想の原型と成るべき諸条件は、北宋代には現実の施設として揃っていたと称してよい」という(大淵 1983:551)。

寄庫の宗教的な応用については、仏教と深い関係があると指摘されている。仏教はなぜ寄庫という制度を利用したのか、その理由は輪廻再生するには、お金がかかるという考え方があるからである。この面では、澤田瑞穂氏の研究がとても詳しい。例えば、「俗説によると、現世に人間として生を受けたのは、託生する際に冥府に応分の寄進または読経をする約束で生まれてきたので、現世ではそれだけの金額を紙銭で返済しなければならないという。これが還受生である。また紙銭類を寺の庫に納めておけば、来生には再び人間に生を受けることができる」という。これを寄庫という。主として江南地方に古くからある俗信で、多くは七七供養や盂蘭盆や地藏会などの仏事に附随して行われた風習でもある」という(澤田 1991:195)。

道教の填庫については、澤田氏は次のように説明する。『道蔵』に収める『靈宝天尊説禄庫受生経』（洞玄部本文類、第一六七冊）は、靈宝天尊が光妙音真人の問に答える形で、「十万一切の衆生は、生命は天曹に属し、身は地府に繋がれる。人身たるを得た日に、地府所属の冥司から禄庫受生銭を借り、禄簿には財を注記して人と生まれて富貴ならしめている。貧乏人があるのは、劫初以来の借金のためで、冥司が禄を奪って窮乏させるのであり、冥司が陽禄を削って陰債の穴埋めをする。かくて貴賤貧富苦楽の差が生じたのだ」と説き、また「この経を念誦して禄庫受生銭を焼還する者は三生男子の身となり、死しても地獄を通らない」と効能を述べる。ところで、人間に生を受けた時には十二の所属の冥曹があり、禄庫を掌って受生銭を貸す、故に今生ではその庫あてに返済しなければならぬとて、十二官曹の姓を列举する。子生の人は欠銭一万三千貫、第一庫に属し、曹官の姓は李である。丑姓の人は欠銭二十八万貫で、第二庫に属し、曹官の姓は田であるなど、すべて十二庫の借金額と曹官の姓とを記してある。

人間が生まれた時に天曹地府に本命銭の願をかけたという。同じく『道蔵』に収める『太上老君説五斗金章受生経』（洞神部本文類、第二四三冊）では太上老君が言うには「もし善信の男女が緒々の善根を種え、善根が断たれなければ、世々人となるであろう。それには五本銭を送しなけれならぬ」と（澤田 1991：200）。

引用が長くなったが、こうした考え方は、台湾の道教の中にも見られるものである。

例えば、事例研究で紹介した高雄県路竹郷の功德で使われた『填庫科儀』には、受生銭の考え方が述べられている。「(死者は)もともと冥財を借りたが、まだ填納するに及んでいない。久しく負債があるが、あえて盟を忘れず、つつしんで長く借りた債を返えし、本生の庫に納入する」と（大淵 1986：548）。また、別の『請庫科儀』によると、「受生銭が（返却されて）もしその満額になれば、極楽世界がすぐに死者の前に現れるであろう」という（蘇 1974：4846）。

以上のような「受生銭」を填庫して借金を返済するという考えは、僧侶や道士などの宗教の知識を持つ人々には、よく知られたものであるかも知れない。しかし、私の知る限りでは、こうした考えがあることをよく知っている一般の人は、ほとんどいないのが実情であると思う。一般の人々には、とにかくなるべく多くの紙銭をあの世の死者に送ってあげることが大切であるという考えがある。次には、一般の人の考えを見てみよう。

（2）一般の人々の金銭観と紙銭

一般の人々は、日常生活において、経済的に大変な苦勞を重ねて、金銭を獲得しようとしている。しかし、なかなか豊かになることは難しいと感じている。金銭はそうした中では、非常に重要であると考えられていると思われる。死者も陰間で生活するには、金銭がなくてはならず、多いほどよいのである。この事については、澤田瑞穂氏が次のように述べている。「(冥界において)万事につけて金銭が物をいうこと現世と変わらない、必要なものは第一に金銭である。だが陽界の遺族親戚から送金してもらわないかぎり、冥途では亡者が自力で金を得る手段はない」（澤田 1991：188～189）。また、民俗史学者の可児弘明氏によると、紙銭を焼く理由は次のようである。

「紙銭を焼いて、これを神明や死者が陰間の費用に当てる。したがって神明や死者を忘れず、誠心をもって仕えている意志表示となる。また陰間で恵まれた経済生活をしてもらえば、その破綻によって人間に加えられる祟りは避けられるという心理的機能を持つことになる」という（可児 1974）。

なお、私は以下のことを付け加えたいと思う。台湾語の諺の中にはお金に関わる内容の諺が少なくない。例えば、「無銭行無路」（金がなければ、何もできない）、「無銭講無話」（金がなければ、道理を通せない）、「有銭烏龜座大廳，無銭秀才人々驚」（お金持ちの亀は応接間に座らせてもらえるが、金のない知識人は誰も相手にしてくれない）、「有銭辦生，無銭辦死」（金があれば活かせる、なければ死なせる）、「有銭衙門八字開，無銭毋免來」（金があれば法廷の門が広がるが、なければ来るな）（洪 1987：76～77）などの言葉はよく日常会話に使われている。「金」の多寡によって、社会地位がどのようにでも変化することを現している。「有銭能使鬼推磨，懷幣可差神掃地」（お金あれば、鬼に臼を推してもらえる。懐の中にお金あれば、神様に掃除してもらえる）、「拿錢去陰間買命」（金を持って陰間へ行き命を買う）、金さえあれば命までも買い戻せるという金銭万能の考え方がある。こうした考えが、紙銭を焼く習俗の背後にあることは間違いなと思う。

第三節 焼紙銭の民間性

本節では、焼紙銭が中国の祭祀全体の中で、どのような場面において現れやすいのか考えたい。またどんな社会的意味があるかも考えたい。まず、歴史的な史料を見よう。

『陔餘叢考』卷三十、紙銭の条によれば、次のようにある。

（原文）

舊唐書王瓌傳，開元二十六年，瓌為祠祭使，乃以紙錢用之於祠祭。通鑑亦謂，瓌用紙錢，類巫覡，習禮者羞之。此又為朝廷祀典用紙錢之始。蓋自昔但里俗所用，而朝廷祭祠用之，則自瓌始耳。然曰習禮者羞之。則其時尚有不用者。唐書范傳正言，顏魯公張司業，家祭不用紙錢。至宋錢鄧公猶不燒楮鏹。蓋古人祭祀，本用玉幣。漢以來，始用錢。後世鬼神事繁，乃易以紙」（19a）

（訳文）

『舊唐書』にいう、「王瓌は開元二十六年（738年）に祠祭使となった。紙銭を祠祭に使用した」と。『通鑑』にも、「王瓌が紙銭を用い、巫覡のようだったので、禮に詳しい人は、これを憎んだ」という。これはまた朝廷の祀典で始めて紙銭を用いた事例である。考えて見るに（紙銭は）昔から里俗によって用いられたものであるが、朝廷の祭祠にこれを用いたのは、王瓌から始まるのである。しかし、禮に詳しい人は、これを憎んだと言っているということは、すなわち其の時に、まだ用いない者があったのである。『唐書』に范傳正が言うには、「顏魯公、張司業が家祭を行う時に紙銭を用いなかった」と。宋に至り、錢鄧公はなお楮鏹を焼こうとしないと。考えて見るに、古人の祭祀には、もとは玉幣を用いた。漢以来、始めて銭を用いた。後世、鬼神を祭る事は頻繁になり、紙を以て取り替えたのである。

この史料によると、唐代の王瓌という人が、国家の正式な祭祀に紙銭を始めて使ったが、儀礼の専門家たちから強い反対意見が出たのである。また唐・宋の時代に儒教の文人たちの一部は、家庭の祭祀でも紙銭を使うのは、よくないと考えていたようである。

歴代王朝の国家祭祀や地方政府の祭祀、更には、儒教の文人が参加する孔子廟の祭りや一部の儒教式の祭りでは三牲、五牲が使われたのであり、紙銭が全く使われなかったか、或いはごく少量だけ使われたと思われる。

また、道教や仏教の古い来歴のある正式な儀礼の節目でも、大量の紙銭を焼くことが含まれていない。このような点から見ると、どれだけ多くの紙銭を焼くかによって、その行事や儀礼の民間性の強さを計ることができると思う。

もう一つ注意したいのは、紙製品を燃やすことが、民間社会の活気を表していることである。例えば、経済の活気がある所では、紙銭や紙製品を大量に燃やしている。台湾、香港、東南アジアの華人の地域、中国大陸の東南沿海地帯などである。しかも、台湾では1949年以後、経済成長にしたがって、ますます焼かれる紙銭の量が増加しているという意見もある。

アメリカの人類学者のヒル・ゲイツ氏によると、中国的な資本主義の発達した所では、金銭を神に送ることが目立つ。このことは、権力や地位を持たない民衆が自分で稼いだ金銭の力でいろいろ自分の目的を実現することの一つの現れである。民間の市場制度を通じて何でも金銭で獲得できるのである。神に金を送ることは、民衆が市場制度の発想を通じて、政治的社会的な覇権に抵抗することを意味するのだとゲイツ氏は評価する (Gates 1985:74)。こうした見方は大変興味深いと思う。以上述べた所から、焼紙銭の民間性が指摘できたと思う。

終章 まとめと課題

本論文では、台湾の南部における漢族の祭祀活動と使用される紙製品について、主に金銀紙を中心として考察した。序章では、なぜあのように多くの紙製品が祭祀に必要なのかという問題を提起した。それは、自分の家で祖母の葬式を体験したことから考え始めた問題であった。日本統治時代に既に焼紙銭をめぐって批判的な意見が多かったことを紹介した。

第一章では、祭祀に紙製品を使用するに至った歴史について書いた。生活用品を副葬することから、次第に紙製品が使われ、魏晋南北朝時代には紙銭が始まり、唐代には定着し、宋代以降、民間の経済の発達に伴って、紙製品の種類も増えた。伝説については、紙を発明したとされる蔡倫が死んだふりをして、冥界ではこの世の紙が金銭となって通用すると主張したことから、この習俗が行われたことを紹介した。

第二章では、台南地方に流通する金紙、銀紙、紙銭、その他の紙製品を分類して示した。特に製造している業者の方からの聞き取りによって、紙厝の需要が非常に多いことなどの実際的狀況が分かった。

第三章は、どのように金銀紙銭と紙製品が使用されるのかについて、事例に基づいて考察した。葬送儀礼、廟の小法事と醮祭、年中行事と人生儀礼の三項目にわけて、それぞれの目的と場面に

したがって、具体的に金銀紙銭が使用される実際について述べた。葬送儀礼について、かなり詳しく調査ができたが、廟の小法事と醮祭、年中行事と人生儀礼の調査は不十分であったと反省している。

第四章では、紙製品使用の背後にある考え方を考察しようと試みた。中国人は、陰間も陽間と同じように物質生活、経済生活を営むと考えており、死者が陰間でよく暮らせるように紙製品を送るのである。また庶民は、いろいろな目的を実現する時に金銭が重要だと痛感しているので、大量の金銀紙銭を焼いて、神や死者に送る必要を考えていることも考察した。そして民間的色彩の濃い祭祀ほど、より多くの紙銭が使用されることを述べた。

以下において、更に考察を深めたい問題点を書きたい。

まず、日本の宗教との比較の問題である。どのような民族であっても、生前に恩を受けた死者に恩返しをしたい、そしてこの世で価値のある物、例えば、宝とか食べ物とか花とかを送ってあげたい気持ちは生じるだろう。しかし、日本で死者にお金を送るのは少ない。よく言われるのは、死者にわらじを持たせ、三途の河の渡舟の代金としての六道銭を送ることである（澤田 1991:193）。台湾の漢族は、買路銭があって、これによく似ている。しかし、紙銭の種類はこれだけではないのである。また、紙銭と日本の宗教の賽銭の違いも指摘されている。賽銭は祈願の叶った時に、感謝の札として社寺廟、または仕者にあげたもので、直接神仏の使用するものでなく、祭祀の費用に充つべきものである。しかし、金銀紙銭は、陰間に送られ、神仏または靈魂の財貨となって使用されるという。二つには大きな区別がある（曾 1995:183。丸井 1919:189 など）。

詳しいことは分からないが、日本の宗教では、死者は、この世と同じように金銭が必要な所に住んでいるわけではないと思う。もし必要ならば、漢族と同じように、やはり大量の紙銭を送らなければならないと考え、そのような習俗があってもおかしくない。しかし、日本の宗教には焼紙銭の習俗がはっきりと見られないのである。

次に、紙銭や紙製品を焼いて神や死者に送るのは、神や死者のためにしているだけではなくて、実は生きている他人に見せたいからであるという問題がある。私の祖父は祖母の葬式の時に、こんな法事をなせるのかということについて、次のように言った。「瞞生人目、報死人恩」（生きている人の目をくらませ、死者の恩に報いるため）であると。祖父は法事の内容が本当かということについて信じていないが、死者に対して何もしないわけにはいかないし、周囲の人は皆法事をするので、やはりするのがよいという考えのようである。きれいな紙曆や大量の庫銭を焼くのは、生きている人に向けて意味を持つ点も十分に考えなければならないと思う。

紙銭を焼く理由については、第四章でも考察したが、ここで改めて書き加えたいことは次のことである。日本の宗教では、あの世では、この世とは別の世界になっていて、あまりお金がかからないようである。しかし、漢族の考え方では、まずこの世において、お金がなければ、たいへん不自由である。お金があれば、物を買うことができ、また人間関係においても、友人や役人にお金を使って、例えば、相手にごちそうをしてあげれば、いろいろな問題をスムーズに解決する

ことができる。このようなことをいつも強く感じて社会生活をしているのである。こうした痛切な感覚を、日本人よりも漢族の方が強く持っていると思う。そして、あの世でも自分の父や母の靈魂が、苦勞せずに暮らすためには、どうしてもお金が必要だと考えるのである。これは、家を離れた自分の子供に親が送金する時の気持ちにもよく似ていると思う。また家族の一人が旅行する時、お金が十分にあるか親が心配する気持ちとも似ている。この場合に金銭がもちろん重要であるが、その背後には家族の一人が金銭がなくて苦勞することについて、同じ家族の者として大変に心配する気持ちが強く働いている。こうした気持ちの表現の仕方は、金銭万能というようにだけ解釈されやすい。しかし実はそこには死者を含めた家族の間の心情の発露があることも忘れてはいけないと思う。

また、最近の若い人がなぜ紙銭を焼くのかについて、1997年3月13日に聞き取った内容を紹介します。

台湾の屏東駅から約200メートルの所にある慈鳳宮（媽祖廟）において、二人の若い女性が大きな金爐の前で紙銭を投げ入れる様子を見た（写真44, 45）。二人は廟の近くにある銀行で勤める同僚同士である。「今日は何の目的で祈りに来たのですか」と訪ねたら、「特定な目的はないが、平安を祈るだけ。また、一日仕事が終わって、女性同士でウインドー・ショッピングよりは、廟に来て神様にお香りをあげ、紙銭を燃やす方がストレスを解消できるし、友達同士の仲が深くなると思っています」という。なぜ、神様に紙銭を燃やさなければならないのかと聞いたら、一つの理由は「讓神明好過日子」（神様が良い生活を送れるように）、もう一つは「回饋神明」（神様に恩返し）と返事してくれた。要するに彼女たちが廟に来るのは特定な目的がないが、精神的には必要としている。「神様が良い生活を送れるように」するということは、神様すらも人からの送金によってよりよい生活ができるようになるという人間中心的な考え方であると言える。紙銭を焼くことのこのような意味合いも掘り下げて考察する必要があるかもしれないと思う。

最後に、紙製の祭祀供品の民間美術作品としての研究価値が、中国大陸でも最近、大いに認められるようになったことを述べておきたい。但し残念ながら、取り上げられる作品の範囲には金銀紙銭は含まれていない（潘 1993）。祭祀に使用される紙製品が地方文化を表していることは、各地方の紙製品がそれぞれ独自のスタイルの美しさを持っていることからよく分かる。例えば、台湾の人が福建省の紙製品を見たら、すぐに親しみを感じるだろう。こうした方面でも十分な研究が必要だと思う。本論文の付録には、金銀紙銭と紙製品の写真を多く提示した。

本研究では事例研究の資料と実物の収集もなお不十分であると感じている。そしてまだまだ多くの問題が残されているが、今後の課題としたい。

主要参考文献・資料

和文文献

- ・丸井圭治郎『台湾宗教調査報告書第一巻』台湾総督府，1919年。
- ・江延遠『台湾葬儀改善要覧』埔里街部落振興會聯連合會，1936年。

- ・酒井忠夫「十王信仰に関する諸問題及び閻羅王受記經」『齊藤先生古希祝賀記念論文集』 刀江書院，1937年。
- ・酒井忠夫「宋代に於ける寄庫の制に就いて」『史潮』第二号，大塚史学会，1938年。
- ・巫永福「金紙・銀紙」『民俗台湾』10号，1942年。
- ・可見弘明「符疏に関する調査（香港）——民衆道教の周辺（その三）」『史学』第四十五卷，第三号，三田史学会，1974年。
- ・鈴木清一郎『台湾舊慣冠婚葬祭と年中行事』台北古亭書屋，1975年。原本は1934年刊。
- ・窪徳忠「沖縄における中国的習俗」『民族学研究』41/3，1976年。
- ・窪徳忠『中国文化と南島』第一書房，1981年。
- ・劉枝萬「中国の死喪儀礼における死霊観」『東アジアにおける民俗と宗教』吉川弘文館，1981年。
- ・大淵忍爾編『中国人の宗教儀礼』福武書店，1983年。
- ・内田道夫『北京風俗図譜』平凡社，1986年。
- ・渡辺欣雄編『環中国海の民俗と文化第三卷 祖先祭祀』凱風社，1989年。
- ・浅野春二「台湾南部の做功徳における設備と要用品について」『國學大學大学院紀要』文学研究科第二十二輯，1991年。
- ・渡辺欣雄『漢民族の宗教』第一書房，1991年。
- ・古家信平，松本浩一「王爺祭の儀礼空間」『神々の祭祀』凱風社，1991年。
- ・澤田瑞穂『修訂地獄変』平河出版社，1991年。
- ・植松明石編『環中国海の民俗と文化第二卷 神々の祭祀』凱風社，1991年。
- ・末成道男「功徳儀礼の二つの型——台湾の事例を中心に——」『東京大学東洋文化研究所紀要 116冊』東京大学東洋文化研究所，1992年。
- ・志賀市子「香港の功徳儀礼にみる中国の冥界観——福佬人集団の「過橋」儀礼を中心に」比較民俗研究会発表資料，1993年。
- ・ジェイムズ・L・ワトソン (James L. Watson)，エウリン・S・ロウスキ (Evelyn S. Rawski) 編・西脇常記，神田一世，長尾佳代子訳『中国の死の儀礼』平凡社，1994年。
- ・野口鐵郎ほか編『道教事典』平河出版社，1994年。
- ・浅野春二「民衆の中の道教儀礼」『国学院中国学会報』第四十輯，1994年。
- ・丸山宏「台湾南部の功徳について」『中国史における教と国家』雄山閣出版，1994年。
- ・古田博司「儒礼教化以前朝鮮葬祭法復原攷」『朝鮮学報』第152輯，朝鮮学会，1994年。
- ・浅野春二「道教儀礼の供え物——現代台湾南部の事例から——」『東方宗教』第86号，1995年。
- ・笠原政治，植野弘子編『台湾』河出書房新社，1995年。
- ・曾景来『台湾宗教と迷信陋習』台北南天書局，1995年（1939年初版）。
- ・蘇素卿「台湾屏東市における葬礼——祖母の葬儀記録を中心に——」『比較民俗研究』12号，1995年。
- ・丸山宏「台湾の道教儀礼にみられる冥界概念」，成瀬良徳〔中間報告〕「アジアにおける冥界信

仰の研究』『大正大学総合佛教研究所年報』第十八号，1996年。

- ・森田憲司「燃やされる紙々」『ケンシヨク「食」資料室年報』第10集，1996・12。
- ・浅野春二「慶土科儀の供物——台湾南部金籙慶成祈安醮の事例から——」『儀礼文化』第二十三号，1996年。
- ・伊原弘，梅村坦『世界の歴史7 宋と中央ユーラシア』中央公論社，1997年。
- ・福田一郎・劉剛編著『文明と遺伝』勉誠社，1997年。
- ・古家信平「拜天公よりみた南部台湾の民間信仰」『歴史人類』第25号，1997年。

中文文献

- ・趙翼『陔餘叢考』、『甌北全集』三に所収，清朝乾隆55（1790）年刊。
- ・蘇海涵編『莊林統道藏』第17冊，成文出版社，1974年。
- ・吳瀛濤『台湾民俗』台北古亭書屋，1975年（1969年初版）。
- ・陳大川『中国造紙術盛衰史』台北中外出版社，1979年。
- ・台南市文献委員会編『臺南文化』新六期，台南市政府發行，1979年。
- ・程大学等『台湾地区現行喪葬禮俗研究』台湾省政府民政廳印行，1983年。
- ・徐福全『台湾民間伝統喪葬儀節研究』台湾師範大学，1984年。
- ・唐茂松「從“冥幣”略析“燒紙”旧俗」『蘇州大学学报（哲学社会科学版）』第3期，1985年。
- ・台湾省議會洪性榮研究小組 全国寺廟整編委員會編『全国佛利道觀總覽』玉皇上帝專集第三冊，樺林出版社，1986年。
- ・洪惟仁『台湾禮俗語典』自立晚報社，1987年。
- ・加藤繁『中国經濟史考証』台北稻鄉出版社，1991年。
- ・黃文博『台湾冥魂傳奇』台北臺原出版社，1992年。
- ・郭為藩監修『中国人的生命禮俗嘉禮篇』行政院文化建設委員會，1992年。
- ・王秋桂總編『民俗曲藝』第86期，財団法人施合鄭民俗文化基金会，1993年。
- ・蒲慕州『墓葬與生死——中国古代宗教之省思』台北聯經出版，1993年。
- ・潘魯生主編『中国民間美術全集2 祭祀編・供品卷』山東友誼出版社，山東教育出版社，1993年。
- ・劉還月『台湾民間信仰小百科〔廟祀卷〕』台北臺原出版社，1994年。
- ・雪犁主編『中華民俗源流集成 儀礼喪葬卷（2）』甘肅人民出版社，1994年。
- ・楊玉君撰稿・王秋桂主編『中国節日叢書』台北文建會，1995年。
- ・范勝雄撰文『府城的寺廟信仰』台南市政府，1995年。
- ・彭明輝「因神明配置圖看台湾民間信仰——以中和地区八座寺廟為中心」『新史学』第六卷第四期，三民書局，1995年。
- ・全漢昇『中国經濟史論叢』台北稻禾出版社，1996年。
- ・黃正璋その他「紙錢」，鄭志明主編『文化台湾・卷一』，台北大道文化，1996年。

- ・鄭康民「我国紙冥器的起源」『大陸雜誌』第三十卷第八期。

欧文文献

- ・HOU Ching-Lang 1975 Monnaies Doffrande et la Notion de Tresorerie Dans la Religion Chinoise PH. D. Dissertation, College de France, Institut des Hautes Etudes Chinoises, Paris.
- ・Gates, Hill 1987 Money for the Gods. In Symposium on Hegemony and Chinese Folk Ideologies, Part II, Modern China 13 (3):259-277.

新刊紹介

林美容・三尾裕子編 『台湾民間信仰研究文献目録』

本書は、日本による台湾の植民地統治の開始された1895年から1997年までの間に、著者の国籍如何と翻訳か否かを問わず、日本語によって書かれた台湾漢人の民間信仰に関する文献を収録整理した目録である。編者の一人である林美容氏は、媽祖信仰や民間仏教を専門とする研究者であり、既に1991年に中文文献を収録した『台湾民間信仰研究文献目録』初版を刊行し、さらに欧文・日文その他新出文献を補充して1997年に該書の増訂版を出している。その増訂版の序で、三尾裕子氏と日文資料の部分を別途に出版するという予定が述べられていたが、それが実現されたものがここに紹介する目録である。本書は、著者・編者別文献目録を主要な目録部分とする。それ以外に、時系列的に研究傾向の変遷を追跡できるよう配慮された年代順文献一覧や、寺廟・人名・地名・事項ごとに文献の標題の語彙から検索可能な索引、そして著者・編者名一覧がある。コンピュータ編集の有効性を活かした成果であり大変便利なものとなっている。

三尾裕子氏は、台湾の漁村の信仰生活、鬼神観、そして近年は大陸福建南部と台湾の王爺信仰の比較研究を進めておられる宗教人類学者である。本書には、氏による「日本の台湾民間信仰研究」と題された研究史の回顧と展望が載せられており、目録の部分の個別研究を研究史の上にどのように位置づけるかの解説として価値が高い。そこでは、日本植民地時期における『台

湾私法』・『台湾宗教調査報告書』、片岡巖・鈴木清一郎・増田福太郎・岡田謙らの業績、『民俗台湾』の意義が紹介され、また戦後期における動向、今後の課題が述べられている。特に植民地時期における業績について、特殊な時代の価値観の上に立っているという限界や、個別事象の詳細な記述が社会の全体的連関性の中に体系化されなかったという限界等を指摘している点は重要であろう。またきわめて多数の業績を生み出した増田福太郎の研究者としての立場は、植民地統治に迎合した面とそうではない面との複雑な様相を呈していて、三尾氏の言われるように、現段階において再度詳細な分析に値するものであり、研究の進展が望まれる。本書を通じて、最新の情報のみでなく、こうした先人たちの業績について新しい分析が行なわれる契機を大いに与えられると思う。

台湾漢人の宗教研究について、台湾の研究者たちの研究成果を回顧する文章としては、管見の限りでは、張珣「光復後台湾人類学漢人宗教研究之回顧」、『中央研究院民族学研究所集刊』81. 1996年があり、中文であるが要領よくまとめられていて参考になる。この文章と林美容氏の目録の増訂版をよく検討し、さらにここに紹介した目録を合わせれば、台湾ひいては漢人(漢族)の宗教についてまとまった研究状況の知識を獲得できるだろう。

(丸山宏)

A 6判 207頁 風響社
1998年3月26日刊 3500円

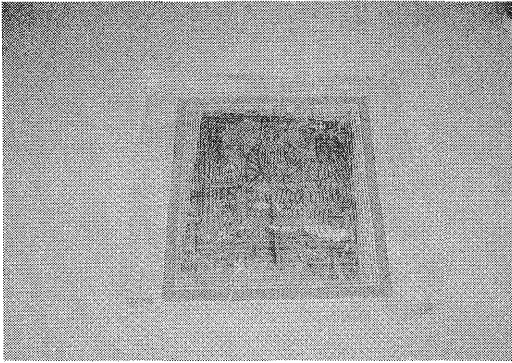


写真1. 天公金。中央に金箔があり、福祿寿の三神が描かれている。35×34cmで紙銭の中で最大の一つ。屏東市媽祖廟で売られたもの。

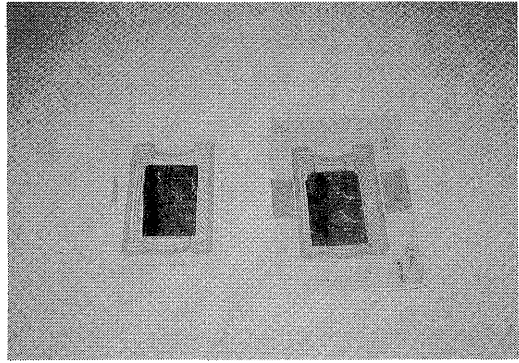


写真2. 天金。金箔があり、中央に赤字で天金とかいてある。屏東市媽祖廟。

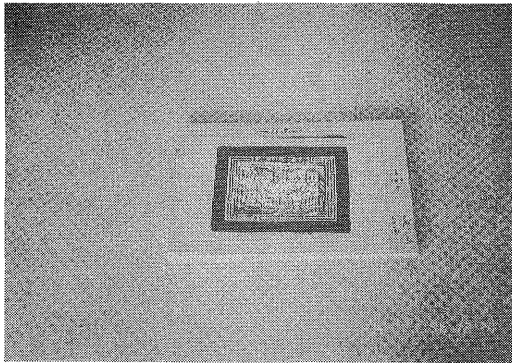


写真3. 寿金。中央に金箔、福祿寿の三神が描かれている。天公金の半分位の大きさ。屏東市媽祖廟。

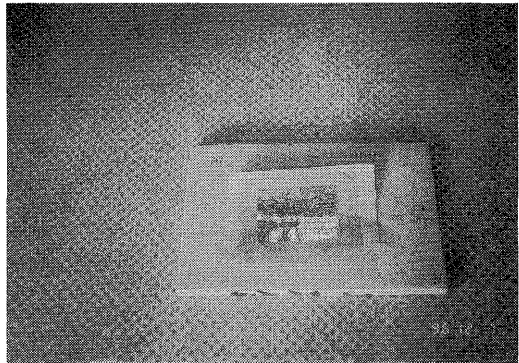


写真4. 九金。約10枚位の黄色紙の上に小さいサイズの金箔を付けた紙が貼っている。屏東市。

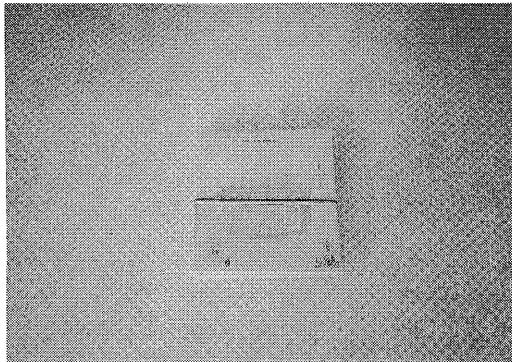


写真5. 金紙。特に小神に送るためのもの。黄色紙の上に黄色を塗り、金箔が付けられている。屏東市。

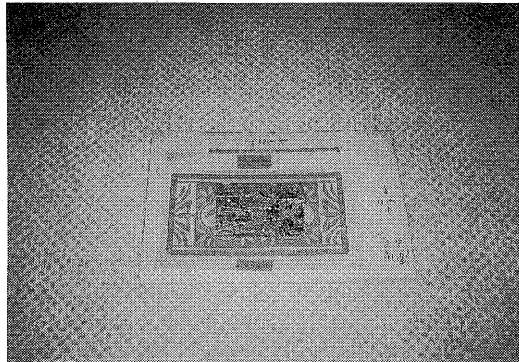


写真6. 尺金。赤い字で尺金と印されている。台南市。

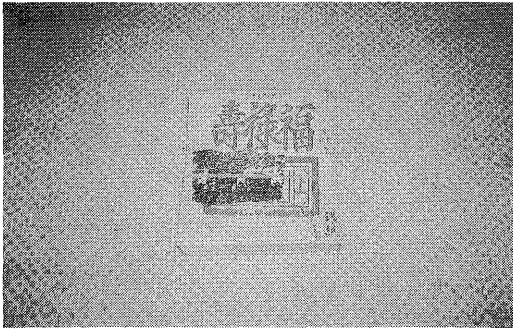


写真7. 銀紙。鬼に送るためのもの。中央に銀箔があり、福祿寿の文字が見える。台南市。

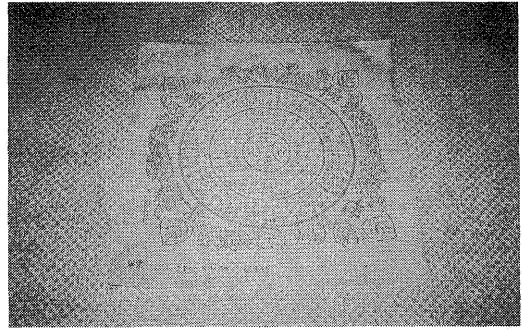


写真8. 往生銭。死者に送るためのもの。蓮の金の花に折ると、蓮花金になる。穴開き銭の形に往生神呪の文字が並んでいる。外側に極楽世界と書かれる。なお、似た型式のものに寿生銭がある。屏東市。

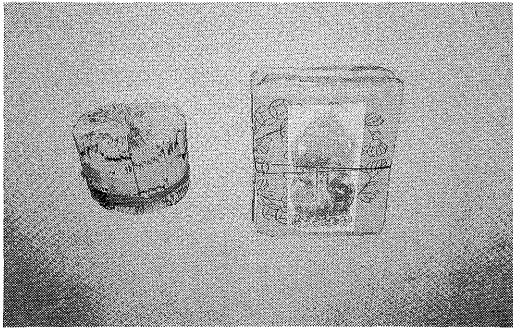


写真9. 左は烏母衣であり、右は花庫銭である。成人式、生育儀礼で用いる。七娘媽や臨水夫人、註生娘娘におくる。台南市に特有のもの。



写真10. 右から上の小さいものが天銭、下の大きいものが天庫銭。中央は水銭と庫銭。左が地銭と。地庫銭。保運の儀式などで使用する。台南市。

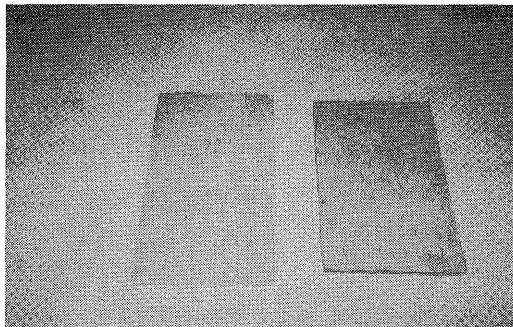


写真11. 大陸の紙銭の例。粗い紙に銭形の穴が打たれている。灰色のが銀紙、黄色のが金紙。四川省成都市文殊院門前の商店。台湾ではこの形式のものは見られない。

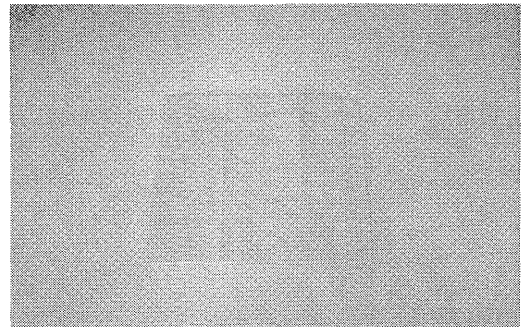


写真12. 沖縄のウチカビ。彼岸やお盆に家庭で使う。これは現在用いられているもの。石垣島。



写真 13. 左藤紙糊店における紙製品の作製。
夫人はもとキリスト教信者だったが、
製造を手伝うようになってから、民間
信仰を信じるようになったという。
蘇麗琴氏提供。

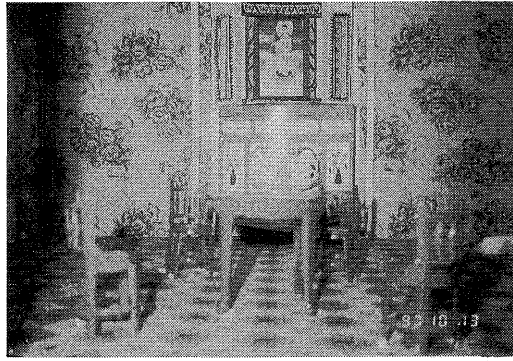


写真 14. 紙厩の内部の様子。観音の仏壇、椅
子、机がある。蘇麗琴氏提供。



写真 15. 紙厩の内部の様子。台所の部分。ガ
スレンジ、食器棚などもある。蘇麗琴
氏提供。

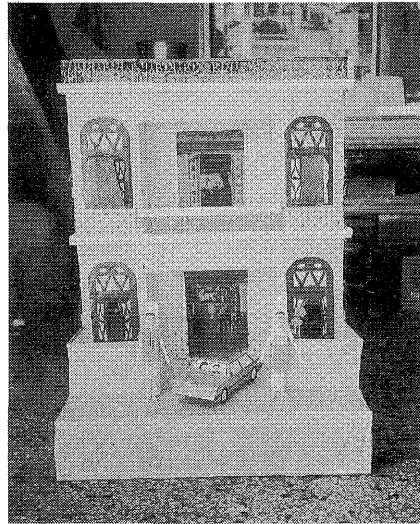


写真 16. 「厩換厩」に使用された紙製の家、
価額は 2000 元する。
洪銘宏氏作成。蘇麗琴氏提供。

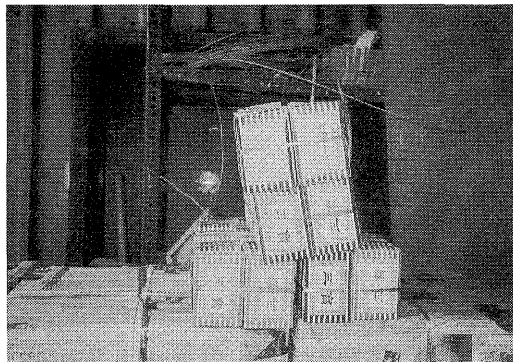


写真 17. 紙銭を入れるための紙箱。三宝と書
いてある。高雄県湖内郷陳福城氏の紙
銭工場。



写真 18. 上記の紙箱の使用例。台南市安平古堡の付近で行われていた功德で使用。

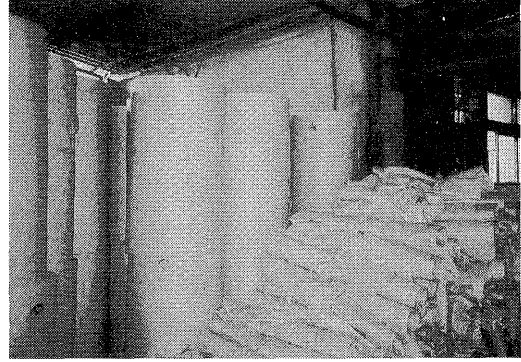


写真 19. 陳福城氏の工場で加工を待つ紙のロール。

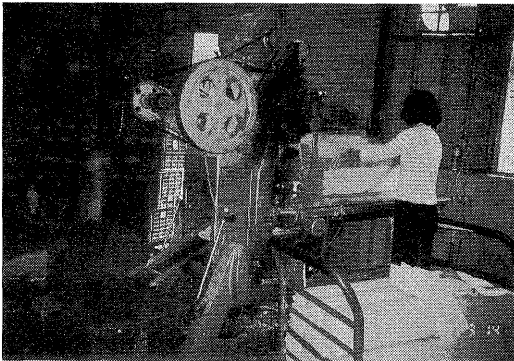


写真 20. ロールの紙を裁断して、庫銭を作っている所。



写真 21. 高雄県路竹郷竹滬村における道教功德の様子。喪宅の前面入口左右に麻灯をかけ、中央の卓上の死者の魂身と金童玉女、金山銀山などが見える。

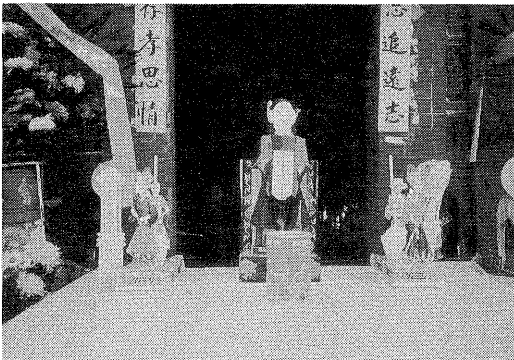


写真 22. 魂身（女性）と金童玉女。

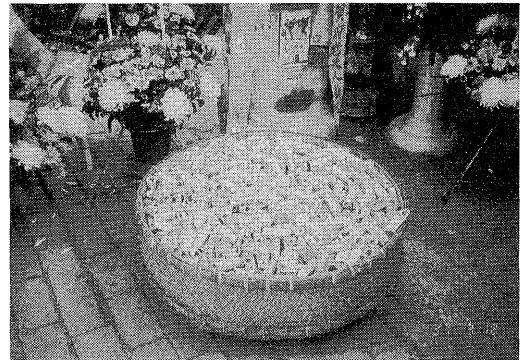


写真 23. 筒状に折った金・銀紙。

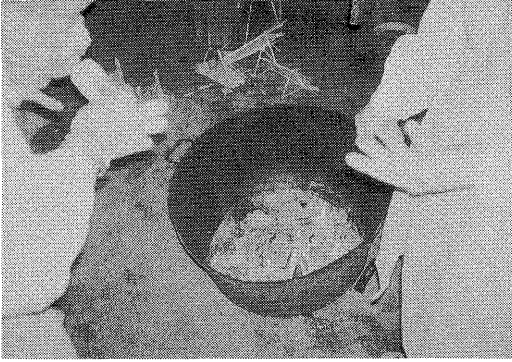


写真24. 儀式が一つ終わるたびに、家族が宅内で紙銭を焼く。

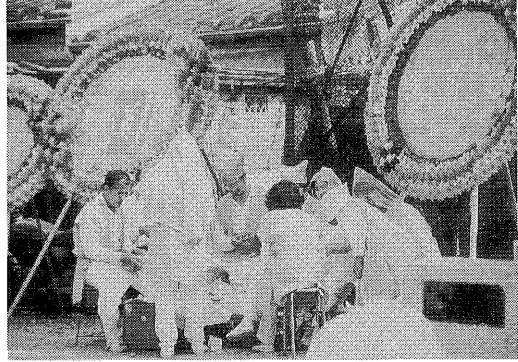


写真25. 儀式の合間に紙銭を折っている家族たち。



写真26. 燃やしやすきように折った銀紙。これは大箔銀であり、功德の時に使用。

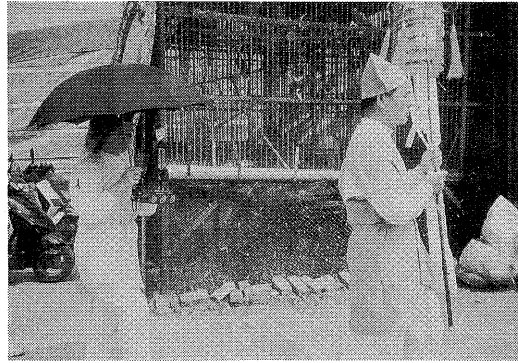


写真27. 儀式のために長男が幢幡を持ち、娘が傘をさして魂身を持ち、道壇に向かう。

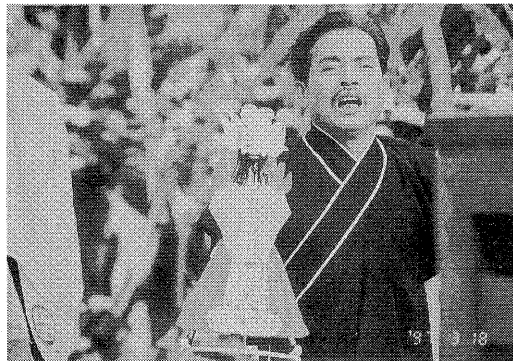


写真28. 放赦の儀式に登場する赦官の人形。



写真 29. 打城の様子。

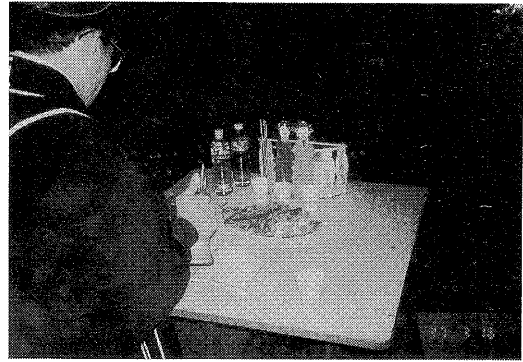


写真 30. 填庫の儀式に使用される庫官とその夫人、銭を運ぶ役夫の像。

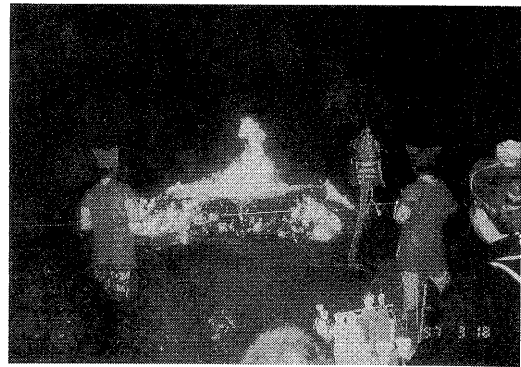


写真 31. 庫銭を焼いているところ。

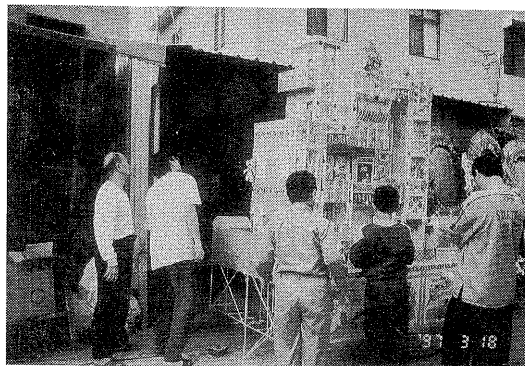


写真 32. 三階建ての紙厩。



写真 33. 紙厩の前庭に投げ入れられた紙銭。
死者の生前の衣服も見える。

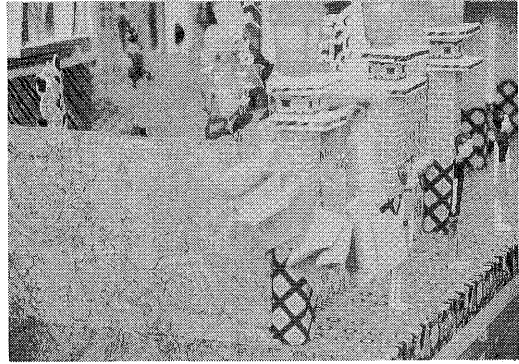


写真 34. 紙厩の角にかけてある金箔。

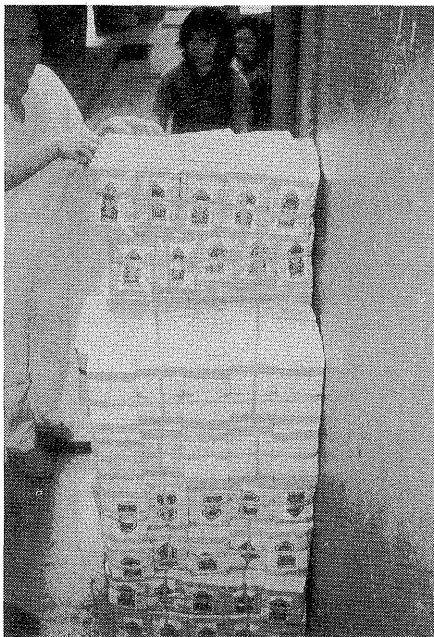


写真 36. 東嶽殿の天庫銭と地庫銭。一人の法
事において焼くのはこれほど多い量で
ある。

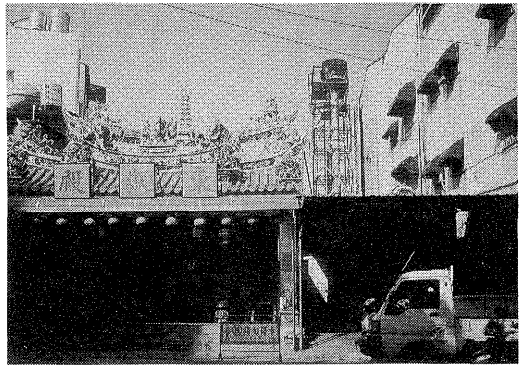


写真 35. 台南市東嶽殿の前景と煙突。

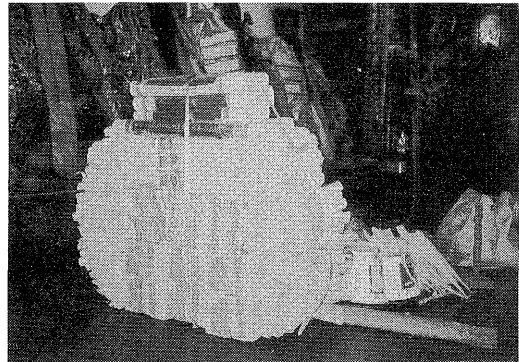


写真 37. 補運金。買命銭をうまく使って全体
の形を円状にしてある。

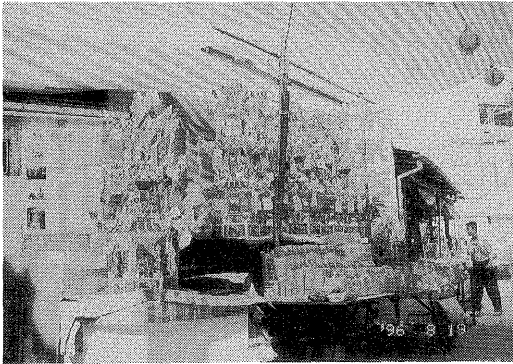


写真 38. 七娘媽亭。廟の近所の店で販売されている。一つ 1600 元。台南市。蘇麗琴氏提供。

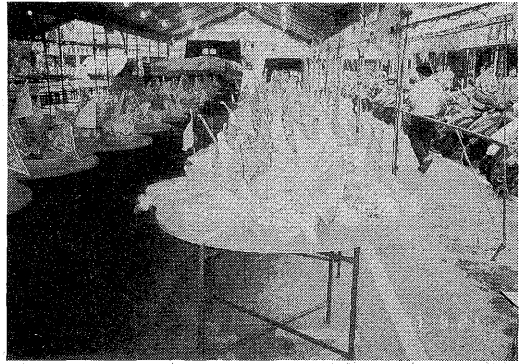


写真 39. 台南市内の普度の様子。後ろのトラックには米が一台分ある。蘇麗琴氏提供。

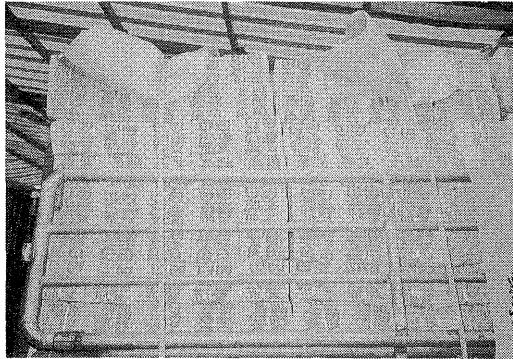


写真 40. 普度で使う大箔銀。蘇麗琴氏提供。

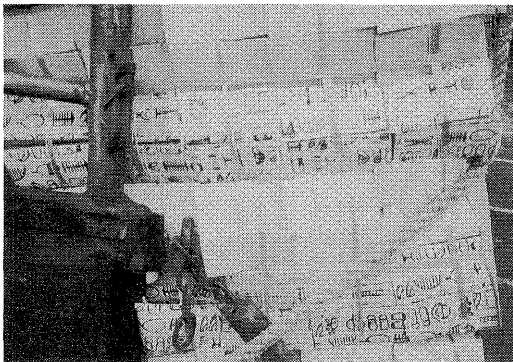


写真 41. 同前。トラックで運んできた経衣。靴、ハサミ、櫛、鏡などが印刷されている。蘇麗琴氏提供。

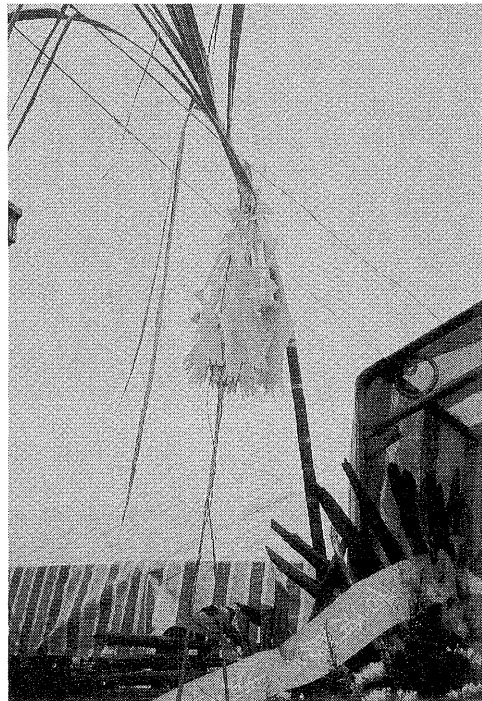


写真 42. 同前。サトウキビに掛ける箸銭。日本の御幣に似ている。

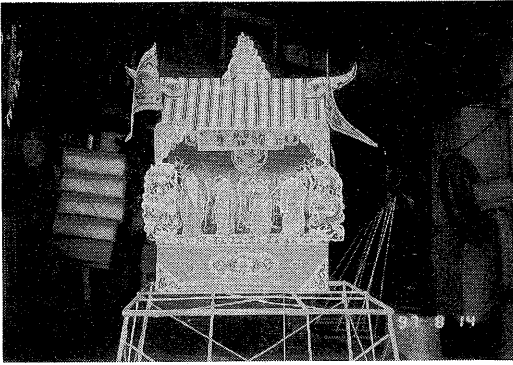


写真 43. 同前。普度で「好兄弟」(孤魂)に
戲を見せるための戲仔棚。台南市。蘇
麗琴氏提供。



写真 44. 屏東市媽祖廟の金炉。

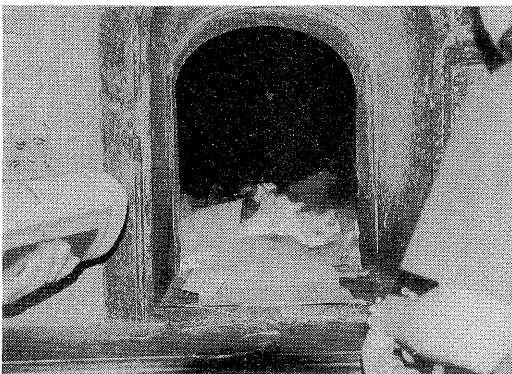


写真 45. 金炉で天公金を焼く若い女性。